



特220

410

尔被石著

家庭之福音

(改訂版)

始

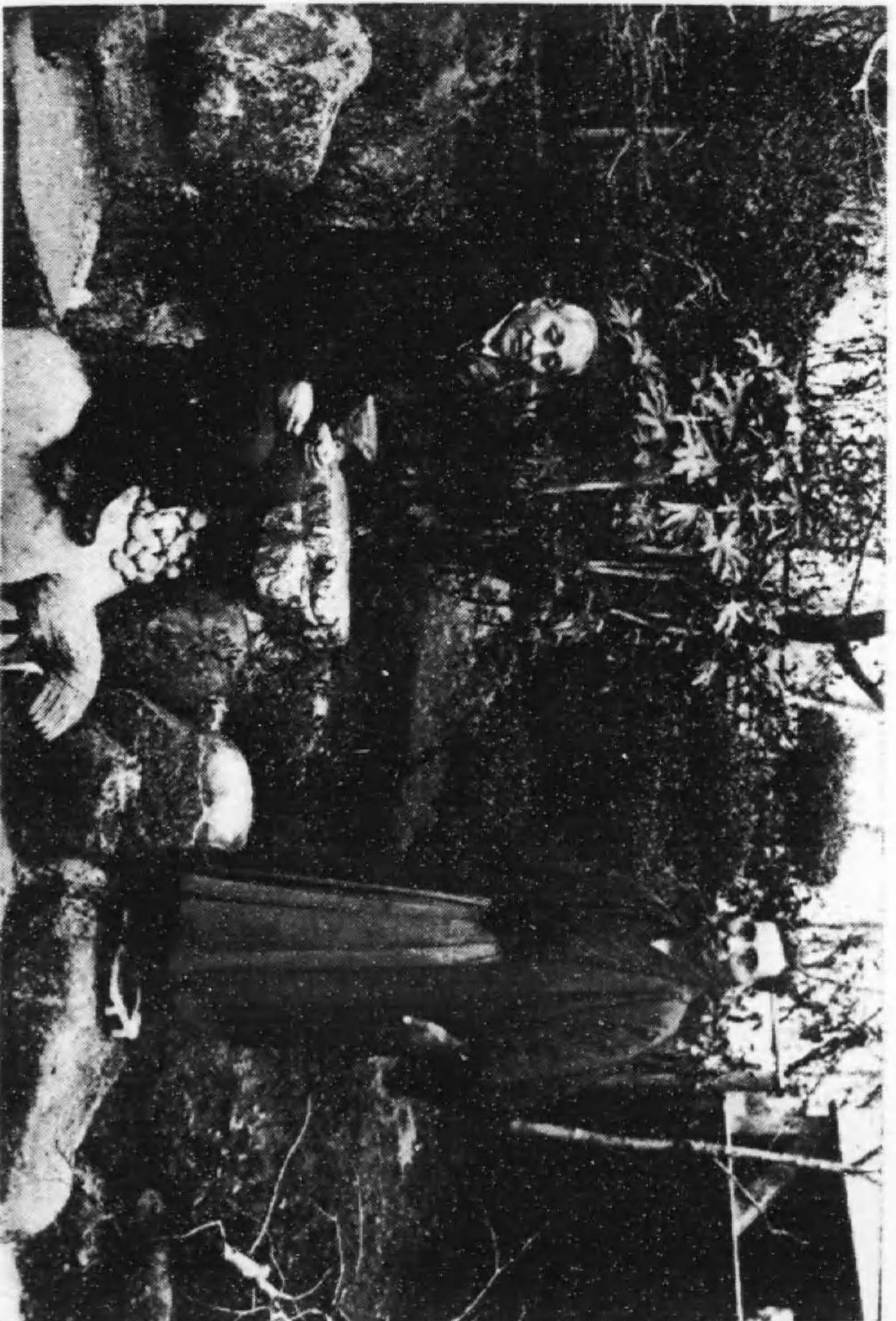


特 220  
410

京  
松  
石  
著

家庭之福音





友人 中島 牧師  
著者  
著者の愛婿近江八幡の（近江ミツシヨソ建築主任）村田氏庭園にて記念撮影

## 序

著者原枕石氏は、余が四十年來の親友にして、且つ二人となき益友なり。近年傳道界を隠退せらるゝも、傳道は一日も廢せず只ミッション直屬の傳道者の自由獨立の傳道者と變りしに過ぎず。而かも彼は信仰の人にして篤學者、特に哲學に造詣深し。併し、パンを焼かざるの哲學者にあらずして、大にパンも焼けば料理もする通人哲學者なり、頃日彼れは一原稿を携へ來りて曰く。之を家庭の福音として出版せんとす。君、如何となす。幸ひに、閲讀批評を加へよと、余、欣然として諾す。此書の説く所、徒らに高遠の理想のみに走らず、極めて實際的にして行文も亦穩健、適切なる實例を擧ぐるこゝ豊富、而して飽くまで基督教信仰の立場に立つて論ずる所、縦横無碍、痛切を極む。余は之を一讀して近來此種の著書中の好著として世に出づるを望むや切なり。

今や我邦道義日に廢れ、古來の美風去つて漸く惡風に死せんとするの傾向なきにしもあらず、特に家庭問題に於いてその然るを見る。斯の如き過渡期に於いて信仰厚く、而して牧會傳道の經驗久しく、而かも篤學者なる君によりて此著を見る、余は此書の家庭寶庫として多くの人々に迎へらるゝことあるべきを豫感して、欣喜雀躍に堪へざるものなり。敢へて此書を江湖諸友に薦むる所以なり。

昭和四年八年下旬

著者の友(牧師)

中島力三郎識

序にかへて

さきに一人の友人に、何ぞ信仰生活の資となるやうな家庭向きのものを書いてはと勧められて、其の主意に従つて題を家庭の福音と題して小さいものを書き、其儘古紙同然古書の中に葬つてあつたが、近頃閑を得たので、又他の友人荐りに此の際何かものせよと強い勧めに動かされて、前の友の厚意にも添ふやうにと其の中の要を取つて骨となし、近來の感を肉とし、以て家庭に於ける信仰の必要を書き、題は其儘『家庭の福音』となしたのであるが、幾分でも友人たちの心にも添ふ所もあり又本書を読む人たちの家庭を幸ひする一助ともなるを得ば幸ひである。

昭和四年六月二十八日

白鷺城下に於て

原 枕 石

# 目次

はしがき	(一)
第一章 家庭の生命	(五)
第二章 敬虔の家庭	(三)
第三章 家庭の教養	(一九)
第四章 家人の孝心	(三〇)
第五章 家庭の支柱	(四一)
第六章 家庭の信仰	(五三)
第七章 家庭の聖化	(六九)
第八章 家庭の不遇	(七九)

第九章	家族の結婚	(九二)
第十章	家庭と人生	(一〇一)
第十一章	遺族の祝福	(一三三)
第十二章	家庭平和と來世觀	(一四四)

(丁)

## 家庭の福音

原 枕 石

は し が き

人生必要缺くべからざるは、家庭である。鳥は巢より人は家庭より世に出るのである。殊に人が人となるには家庭を要す。人は自然自己の性に應じて家庭を作つた。元來其原始時代に於ては遊牧群住か團體生活であつた。だが、現時の都人が目白押し都市生活に堪へ兼ねて、再び郊外に居を移す如く原始時代の人々も穴居や群住の古き巢を脱して本性にも適した幸ひな家庭生活に移つた。

家庭、是れは人類社會の母である。社會百般の文物は凡て此母胎より生れ出たので

ある、と云ふのは人が先づ家庭を作り家庭は偉人を造り、而て偉人は世に文化を造り出だした。家庭は文化の發電所だ、凡て世の文化文明は家庭より流れ出だしたのである。家庭と人生、家庭と社會、家庭と文化、是は相即不離の關係を有す。だから人類學も證して

人類の協同は……辛抱強き母親の愛と勇敢なる父親の家庭保護とに基づく所の家庭道徳から出立した者で、家庭から近隣へと次第に同情が波及して親類と親切とが一致する迄になつたのである。個人を犠牲にして社會の爲に盡し自國を愛する如く他國をも愛し、愛を以て世界を帶するに至つた世界主義四海同胞主義は一に此微弱な家庭愛の延長であつたのである。鬭争に依つて進化が來たされたと觀る僻見は、今日に於ては最早や一部の人々から拒否されるに至つた。第一に人間に角がなく爪がなく牙がなく鱗がない事が人間の進化が鬭争に依つて來たされたものでない事を示す有力の證據である。

と説いて居る。人類進化の出發點は家庭であつて、家庭愛は人間社會凡ての基礎である。殊に人は家庭がないと生存が不可能だ、虫は孵へると自活するが、人は十年も十五年も親に養はれる。其れでないと子女の成長は不可能だ、スバルタの様な教育をした國でさへ、子供が生れて七年間は家庭で育てた。魚は水、人は家庭がないと成長ができぬ、少くとも其教養なくしては人らしき人には成り得られない。

だが家庭も亦其素質に由る、人が人らしくなるのには家庭が家庭らしくなければ不可能だ、家庭らしくない家庭の生み出だす不良の徒には社會も固る。不良の子故に自分も泣き又人をも泣せぬやうに各自家庭に注意せねばならぬ。如何に良い種でも砂漠では良果は得られず、荒れ果てた家庭では人物は起らない、蠻人の家庭からは偉人は生せぬ、果實は地質に由り人格は家庭に因る、ワシントンには良家より出たのである。

良家とは單に富や位を有する家を云ふのではない。土井愛子と云ふは、資産家の令女であつた。だが家庭に悲觀して身を海に投じて須磨の仇浪と消えた。家には情味が



必要だ、熱い同情の家に満るのは巨萬の富に優る、リンカーンは貧家に生れ、基督は貧乏大工の家より出で給ふた。山高き故に貴とからず、家も富むが故に幸ひなのではない。家庭は人材を出だすを最良とするのである。ミルトンは云ふた「善人は地球が神に捧ぐる最もよく熟したる果なり」と土地は果物を家庭は善人を産するのが使命である。

で基督教は個人の救ひと共に家庭の救ひをも説く、基督は言ひ給ふた「今日救ひは此家に來たれり」(路一九〇九)と家の救ひ是れが全き救ひである。人生、個人の救ひのみでは心は満たぬ、少くとも一家の救ひがないと満足出來ない、人生は共に悦び共に悲む所に妙味が存するのである、個人の救ひが一家に溢れて全家の喜びとなる、其れが眞の福音である。基督の福音には其力が満て居る、基督は仰せられた「我を信する者は聖書に云へる如く其腹より活ける水、川の如く流れ出づべし」(約七〇三十八)と、其故基督の福音を信する者には恩みが泉の如く湧いて自然家を満たし、流れて社

會をも濡すのである。エスは「天國はバンだねの如し」(太十三〇三十三)と仰せられた。基督の福音は膨脹する。其救ひが自己一人に止らず一家凡ての幸ひとなる、故にパウロは云ふた「主イエスキリストを信せよ然らば汝及び汝の家族も救はるべし」(使十六〇四十六)と。

## 第一章 家庭の生命

天地は創造の世界である。鳥は巢を造り、蠶は繭を造る、神に創造された萬物は共にその性を有して凡てのものが創造の爲に働く。凡てが働くが人間の働きは更に異なる、等しく造るのであるが、造るものが違ふ。同じ生物でも植物と動物とでは生命の働きが違ふ、人と動物とでは生命の現はれが異なる、人は世に文化文明を造り出した、人間は生物進化の絶頂である。此進化の頂點が文化創造の生命である。だが其文化創造の人を造るのは家庭である。而て人は創造もするが、破壊もする、人には破壊的の者

もあれば建設的の者もある。家庭には創造的人物を作る者と破壊的人物を出だすものとの別がある。破壊者を出だすのは生物進化の法にも背き、生物の創造性に戻る、だから家庭には大の責任もあり使命もある。

だが家庭にも種々な別がある。大體は二つである、即ち一夫一婦の家庭と、一夫多妻の家庭とである、が一夫一婦の家にも亦三つの別がある。其の一は夫婦共に善良の人が揃つた家である。其二は良と不良との混成の家庭である。三は不良と不良との似た者夫婦の家である。斯く家庭構成の要素が異なるから、従つて其處に現はれる生命も異つて来る、夫婦は家庭の中心生命である。其れは一人の生命でない二者合して一個となつて現はるゝ生命である。だから良と良との揃つた夫婦の家庭と不良と不良との家とでは雲泥の差がある。従つて此間に生ずる人物も自然大差を現はす、だから兩者揃つた善良の家庭を要するのである。

だが家庭は夫婦の素質に因る、農家は先づ種を撰ぶ家庭も極めて純なる夫婦の素質

に注意しなければならぬ、が其の結合について、チョーサーは面白く晝がいて居る。尤も是れは中世紀の思想で古い所はあるが、分り易く書いてあるから、カンタベリ物語りの一節をあげて見やう。

結婚は神聖な者の一つである。妻のない者は墮落した人間だと私は思ひます。僧侶ならぬ人々に就て言へば、結婚しない男は、頼なき淋しい一生を送ります。私の言ふ事が無意味でない證據には婦人は男子の助けとならんが爲に造られたと云ふ道理を御話し致しませうか、昔し神様がアダムを御造りになつてから……アダムに似た人間を造つて彼の助けにしてやらうと親切にも御託宣になつて其れから彼の爲にイグを御造りになつた之を見ても妻は夫の助けとなり夫の慰めとなる者で、言はば男の爲に此世を極樂として彼を面白く暮らさせる者である事が解るでせう、であるから妻たる者は従順で貞操であるべきわけの者、亦夫婦は仲睦しく暮すのが人間の道であるのだ、即ち夫婦は一つの體で一つの心で、幸福の時にも不幸の時にも睦しく

するのが當り前の事だ、何と云ふ好い者ではありませんか、妻のある人は如何なる不幸も知らぬわけです夫婦の間の幸福は他人には逆も言ふ事が出来ぬ者、又推量する事も出来ぬもの、若し夫が貧乏であれば妻は夫を勵げまして働かせます。而て自分分は夫の財産を守つて少しでも濫費なごしない様に致します。夫の氣に入る事は何んでも悦んで満足します……結婚と云ふものは貴くして其の上難有い善いものだ。と夫婦の成立を書き、更に此筆法を以て夫婦一體の理に説き及して、夫婦互に相愛すべきは勿論、夫婦は二者一體であるから、妻の身も夫のもの、夫の體も妻のものである、だから自分の身體でも自分一個のものでない、二人のものである。自分の身體でも自分一個の舉動をなしてはならない。自分の身は夫婦のものだ、夫でも妻でも、決して自分の身を自由にしてはならぬ事を説いて居る、是れが眞の夫婦である。夫婦とは單に男と女と二人相寄つた姿を云ふのではない、東西遠く離れて居ても、愛に依つて固く結ばれた心の相を云ふのである。其間に不純の心が少しでも起るなれば其

れは眞の夫婦でない、主イエスは云ひ給ふた「人を造り給ひし者、元始より之を男と女とに造り……人は父母を離れて其妻に合ひ二人の者一體となるべし……然らば、はや二人には非ず一體なり此故に神の合せ給ひし者は人は是れを離すべからず」(太十九〇四—九)と是れが夫婦の本質である、夫婦は二人の人でない二人で一體の相である。是れを二つに離しては夫婦でない、一つの蟻でも二つに離せば其生命は消え去る、夫婦も二つに分かてば其生命は消えて仕舞ふ、眞の夫婦は純な清い神の結び給ふ一夫と一婦との一體である。斯る結合の家庭に神にも献じ得られる立派な果を給ふのである。

世には未だ一夫多妻の家庭もあれば一妻多夫の社會もある。其れがために幾多の悲劇を生むか計り知れぬ、例へば九州六ヶ國の探題迄も努めた加藤左衛門重氏の如きも、妻と妾との嫉妬怨恨には堪へ得られず、身は刈萱となつて世を送つたが、一家は悲惨、殊に一子石童丸の如きは世に聞くも憐れな涙物語りを残した。マホメットも多

くの妾を蓄へた爲め宗教家でありながら家庭には波瀾があつた。尤も是らは過ぎ去つた昔し話であるが、石川や濱の眞砂は盡るも世に蓄妾の種は盡きず、大正十五年九月九日の新聞であつたが、『伯爵の落胤を悲しんで死の旅に立つた青年』と云ふ見出しで、某伯爵の妾腹の子が生涯日蔭者として生きる事を厭ふて自殺したと云ふ痛ましい記事があつた、が是れは現はれた一つの事であるが、尙ほ隠れたる悲惨な事も多くある。

更に甚しきは其神聖を無視した氣儘勝手な結婚である。その種の結婚が生む害毒に社會は何程苦められるか分らない、本年の始め帝都の人々を戦慄せしめた妻木と云ふ強盗も、新聞の報する所に依れば、其母は工場生活中、其れも十八の時、不義の種を宿し其結果生れたのが、第一世説教強盗であつた。瓜の蔓には茄子はならぬ、無茶な結婚に良果を生ずる筈がない。だらしなき生活や結婚が、何程世に害毒の種を播くか知れぬ、失火で隣を焼いても罰がある、不良の子を出だして社會を害ふても責めがあ

る筈だ、衛生の爲め、共同で清潔に力める如く、不良の徒を出ださぬやうに、協同で家庭の良化に努めなければならぬ。

堅固なる家を建るには堅固なる基礎を要し、善良な家庭を造るには善良な基礎を要す、善良な家庭の基礎は善良なる夫婦である。健全な家庭の基礎は清き一夫一婦の制である。幸ひに昭和の御代は、陛下が固く一夫一婦の制を御守り遊ばされて、世に其の範を示し給ふ、國民は慎で其の制に従はなければならぬ、大學に『其國を治めんと欲する者は先づ其家を齋ふ』と云ふ語があるが、家庭の良化も治世の端だ、殊に政治に志す者などは其本を務めなければならぬ。グラッドストーンは世界の大政治家であつた。而て立派な家庭の持主である、或る時、金婚式の祝會を催された。其時在英中であつた、波斯の王が其式に臨んで其席で述べられた言葉に『グラッドストーン氏は五十年間一人の妻を守り、余は一生の間に五十人の妻を有つた、併し眞の幸福はグラッドストーン氏の方にあつて余の方にはなかつた』と、多妻は人生の自然でないから、人に眞

の幸福を與へない、家にも世にも幸福を齎らすのは清き一夫一婦の家庭である、獨逸のフェルティングと云ふ學者が百餘名の天才を擧げて研究した結果に因ると、天才は法律家と牧師の家より最も多く出て居る、其中でも牧師の家庭より一番多く出て居る其れは牧師は比較的清い生活をするからであらうと云ふて居る、最もよく熟したる果は斯る清き家庭の産である。

## 第二章 敬虔の家庭

神は天地の主である。故に一家の主であらねばならぬ、神は天地の主であるが特に人間の主である、で一家の柱石たる夫婦には神を主として崇め敬ふ念が熱くなければならぬ、夫婦は家の土臺であるが、單なる一夫と一婦との結合が其家の土臺となるのではない、其の兩者の人格如何に存するのである、ソロモン王は「エホバを畏るるは知識の本なり」(箴一〇七)と教へたが、神を畏敬するは人格の本だ、此の嚴かな心が

家庭の土臺でなければならぬ、然るに神を信する者は多いが、神を敬ふ人は少い、神に求める人はあつても、神を崇める人は稀れた。神に對する觀念が、神が主でなくして人が主なのである。神を天地の主として崇敬するのではなく、人が主で人の病氣を助け乏しきを救ふ、人の生活を守る神であつて、多くは苦しい時の神頼みと云ふ言葉通りの神信心である、是を強ひて言ふと苦しい時がなければ神には必要ないわけで、神があつての人間でなく、人間あつての神であり、神があつて人間を造られたのではなく、人間があつて人間の生活を助ける爲に神が出来た姿である。それで農家には農の神、商人には商の神、漁には漁の神、病人には病を治する神と云ふ様に、種々分業の神が作り出だされた。要するに生活中心の神で、信仰も亦家内安全息災延命の人間中心の信念に過ぎぬ。

だが神は天地に唯獨りだ、神は天地萬物の創造者で凡てのもの、主であり父である。神は天地の主である。國に主は、上御一人の如く天地にも主なる神は一柱である。

神は天地の主であるから、主として尊崇しなければならぬ。基督は『汝らは斯く祈れ天にいます我らの父よ願くば御名の崇められん事を、御國の來たらん事を、御意の天の如く地にも行はれん事を』(太六〇九、十)と教へ給ふた、尤も是れが其の凡てではない、が先づ第一に神の御名を崇めよと仰せられたのである。是れが祈りの中心是が宗教の中心でなければならぬ。基督の宗教は人間中心ではない神中心である、神があつて天地が出來たのであるから神第一だ、而し基督は祈る時に神を我らの父よと呼べと仰せられた、神は天の父だ、我らの父母は我らが無意識である時に、生れ出づるや暖かに着せ、流れ出だす母の乳房よりの乳で我らを孚み養ふた、父の守り母の愛』愛は神より出づ』(一約四〇七) 母性愛も家庭愛も凡て其源は天の父より發したのである。

基督教では聖書の劈頭に、『元始に神天地を創造り給へり』(創一〇一)と記してゐる、始めに混沌たる鶏子の如き者があつて其中より神が出たのでなく、却つて神の靈

が母鶏の卵を抱く如く凡を覆ふて天地も出來、萬物も生成したのである。而て萬物豊に具つて其間に人が出來たのである。神は愛だ、生物を餓死せしめ給はない、嬰兒には乳が備へてあり、栗の實は其芽を養ふ爲めの乳としての備へである、卵の中には雛となる迄の滋養の爲に黄味や蛋白が備へてある。植物も動物も生れぬ前に生れてからの養分を有して居る、況や人間に於ておやだ。故に生活問題にのみ心を勞さずとも神は備へ給ふ、イエスは訓へ給ふた。『何を食ひ何を飲まんと生命の事を思ひ煩ひ何を着んと體の事を思ひ煩ふな……先づ神の國と神の義とを求めよ然らば凡て是らの物は汝等に加へらるべし』(太六〇二十五、卅三)と。神の御名を崇め神の義を求めて、義しい奉仕さへすれば、神が自然に具へ給ふと云ふのである。是は人の自然である、孟子は云ふた『人の學ばざる所にして能くする者は其れ良能なり慮らざる所にして知る者は其れ良知なり、孩提の童も其親を愛する事を知ること無きなり。其長するに及んでは其兄を敬する事知らざるることなきなり、親を親しむは仁なり長を敬するは

義なり』と、長上を敬愛するは人の自然である。イエスは『汝心を盡し精神を盡し思を盡して主なる汝の神を愛すべし』(太二十二〇三十七)と、神を愛することと神を崇め敬ふことを教へ給ふた。

だが多数の人々は信仰の中心を失ひ、パン問題、生活問題が其中心となつてゐる。殊に宗教迄が人間の生活が中心となり、敬神に重心を置く宗教はなく、殆ど人間中心の宗教であるが、敬神は宗教の生命である。敬神なき宗教は生命なき宗教だ。殊に神は生命の根元である、其生命の本なる神を敬はない宗教には生命はない。宗教に生命がないから其宗教を信じて居ても其信仰には生命がないのである。昔しノアの時代が其れであつた、『人々飲み食ひ娶り嫁ぎなどし洪水の來たりて悉く滅すまで知らざりき』(太二十四〇卅八九)とあつて、人間の精神は只パンと結婚とのみの問題となつた爲めに亡びたのである。だから敬神の念なき信仰は危険だ、ペテロは『古き世を容さずして只義の宣傳者なるノアと他の七人とののみ守り、敬虔ならぬ者の世に洪水を

來たらせ、又ソドムとゴモラとの町を亡びに定めて、灰となし後世の不敬虔を行ふ者の鑑とし』(彼後二〇五六)と云ふて世を戒めてゐる、不敬虔は死であり滅である、而して敬神が眞の生命である、だから家庭の安全を希ふなれば、敬虔を其基礎としなければならぬ。

幸福は敬神の果だ、パウロは云ふた『足る事を知りて敬虔を守る者は大なる利益を得るなり』(提前六〇六)と神を敬ふ其處に大なる益が存するのである、アイザック、ニウトンは敬神家であつて、道を歩んで居る時でも神と云ふ言を發する時は必ず帽を脱して語つたと云ふことである。米國の大統領ハリソン氏も敬神家であつて、日曜日教會に於ける禮拜には、雨の日でも雪の折りでも、神を禮拜する日なりとて、何らの乗り物も要せず、徒歩で嚴かに教會に列せられた、グラッドストーンは更に嚴肅に聖日は神と交る日なりとて其日の禮拜が終るまでは、途上人とも言葉を換はさなかつた、神を生活の道具とするのでなく、崇敬の念を以て神に交る人は自然人格も聖化される、

眞の畏敬は自己の淨化は勿論の事家族をも淨化する、聖書は證明して、『カイザリヤにコルネリオと云ふ人ありイタリヤ隊と稱ふる軍隊の百卒長なるが、敬虔にして全家族と共に神を畏れ且つ民に多くの施濟をなし常に祈れり』(使十〇一)とありて全家族と共に神を畏れ且つ常に祈りをしてゐた、そうして其の祈つた結果、親族も親友も多くの人々が救はれたと記るされて居る、是れが家庭成立の使命で、茲に眞の幸福も宿り圓熟した果も結ぶのである、家庭成立の眞意は『是れ神を敬虔ふの裔を得んが爲めなりき』(馬二〇十五)で家庭は敬神家を養成する所である。

而して眞の敬神の家であれば親に似た敬虔家が出来、ザカリヤとエリサベツとは敬神家であつた『二人ながら神の前に正しくして主の誠令と定規とを缺けなく行へり』(路一〇六)とあつて神を畏れる美しい夫婦であつた、此清い家庭から基督が『女の生んだ人の中で未だ彼の如き者なし』と仰せられたやうな、バプテスマのヨハネが生れた。神學哲學の大家シユライエルマヘルは、祖父も父も牧師であつた、哲學者のデ

イルマイルも、牧師の家に生れた、哲學と教育學を書いたナトルブも、牧師の家庭より起つた、而てパウル、ナトルブは『教育に於ける精神と威力』と云ふ題で講演をなしたものの中に『あらゆる人に最もよく知られて居る最も簡単な基督教的に言はしめば愛による愛への教育である』と云ふ威力よりも結局は愛の精神の勝利を説て居る。斯る人が家庭から多く輩出することに依つて罪の世が、神の子の世界となるのである

エホバ家を建て給ふにあらずば

建つる者の勤勞は空しく

エホバ城を守り給ふにあらずば

衛士の醒め居るは徒勞なり

詩百二十七〇一

### 第三章 家庭の教養

人は教を要し蠶は桑を要す、が蠶は教へないでも繭を作る、だが人は教へないでは文



化を造り得ぬ、人は到底パンのみの生物でない。パンも要するが教養も要す、然るに學校教育を受け得られない不幸な子が多々ある、でも其の不幸な子たちにも多くは家庭があるであらう、家庭は最良の學校である。リンカーンは學校教育を受けなかつた人であるが、幼い時から母に能く聖書を教へられた、リンカーンは聖書一卷の人であつた、でも米國の三大聖人の中の一人と稱せられるやうな大なる人物となつた、殊に人は幼き時の教養が最も大切だ、だから家庭の教育が必要である。

家庭の使命は子女の教育である。子女を立派に教養して社會に出だし、以て世の生命を、より、高くする、其處に一つの使命がある。其の使命を果して子供を一人でも完全に作り上げれば、倒れる家も興り、社會をも益する、子女は人生最上の賜だ。『白金も黄金の玉も何かせん優れる寶子にしかめやも』で、子は黄金よりもダイヤモンドよりも貴い、子女は家の生命だ、子は二者一體の間に結んだ生命の眞の實だ、此生命の伸び工合ひで、一家の運命は定まるのである。ガーフキールドは開墾地の丸木小屋

で生れた人であつた、其れも生れて六ヶ月にして父を亡ひ、母には尙ほ其上に二人の子供があつたので、まだ開墾も緒について居ないのに三人の子供を残されたのであるから日々の事にも不如意のことが多く、三兒の成長中は常に毎日二食で居た。時には其れすら取り得られず一食のことも間々あつたことだ、其れでも日曜日には二里の路を三兒を引連れて教會の集りに缺けなく出席した、斯くして教養されたガーフキールドはリンカーンと共に米國三大聖人の中の一人に數へられる偉大な大統領となつた。子は家の珍寶である。

而て幼兒は美しい、世に多くの美しいものもあるが幼兒の其れには及ばない、土井晚翠は歌うて居る。

奇しく妙なる天つちの

清きいみじき美しくしき

薫るさ百合の花びらか

何に譬へん幼兒よ

汝が心根の面影を

おく曙光の白露か

みどり色いろこきおほ空そらの

照る紅くれないの夕づか

三三

と眞に幼児は美しい。人類が數千年間、蓄へて來た文化の力で作り出す藝術品でも幼児の美とは競争は出來ぬ實に幼児は貴くして美しくしいが、此貴い美しい賜を其不注意の爲に亡ふ人が少くない、統計によると、乳兒期の死亡率が一番多い。然るにニュージーランドでは育兒に注意する様になつてから、百人生れて、乳兒で死するのは三人か四人であると云ふ、日本では百人生れると十七八名より多き時は二十五六名も死ぬと云ふ、折角天より賜つた貴い寶を不行届で亡ふのは實に惜い。ライマン、ビーチヤーは七ヶ月で生れた月足らずの子で、發育不充分で動きも泣きもせず、産婆も捨ておきて外の事をして居る間に、泣き始めたので取り上げられたのであつたが、注意深い母の愛に育み育てられて健全に成長したと云ふのみでなく、而も世に有名な説教家となつた。幼児の養育には最深の注意を要する。

殊に必要なるは清い心に傷つけぬことである。心に龜裂が入ると育つても却て涙の

種である、而も人は最美より最醜に化す。エレミヤは「心は萬物より偽る者にして甚だ悪し」(耶十七〇九)と云つて居る。だが其れも水は方圓の器により、人は家庭の教養に因る、だから家訓が大切である。勿論誰も自分の子を悪くしやうと思ふ者はない、皆教育に力める、全國では小學校の教員のみで約二十萬の先生が教育に力を注いで居る、其れに中學高等又は大學の先生は約四萬人で、二十四萬の教師が子弟の教化に盡し、而も小學校教員の俸給のみでも一億二千萬圓の費を投じて教育に力を傾注して居るのである、だのに民心は次第に悪化して不法の徒や不良の子が續出する。父兄も社會も共に困る。近來は智徳體の三育のみでは足らざるを痛感して、靈育即ち宗教々育の必要を叫び出だし、前文部參與官の安藤正純氏も『日本の現在と比較して、もつと宗教的要素を教育中に取り入れたならばと思ふ』と英國の例を擧げて論じて居られる。由來人は神に造られた者であるから、教も亦、神より受けるが當然の道である。ウエリントンWellingtonは云ふた「神なくして人に教育するは智慧ある惡魔を作るなり」と。神を

三三

離れた教育は、文化的の悪魔を造り出だすのである。基督教では先づ第一に幼き時、左の如くにして教養するのである。

イスラエルよ聽け、我らの神エホバは、唯獨りのエホバなり。汝心を盡し精神を盡し力を盡して、汝の神エホバを愛すべし、今日我が汝に命ずる是らの言は、勤めて汝の子らに教へ、家に坐する時も路を歩む時も、寢る時も起る時も是を語るべし、汝又是を汝の手に結びてしるしとなし、汝の目の間に置いて誌えとなし、又汝の家の柱と汝の門に書記すべし。

(申六〇四—九)

と、幼い純な心に先づ神の教を刻む是れが其精神である。

それで篤信の家では子供に能く神を教ゆる、十九世紀の豫言者と云はれた、ラスキンは幼時に能く聖書を教へられた人であつた、家は平和で嚴肅な清教徒の熱心な母があつて夫婦共温和で、家に争の聲などの聞えたことのない天國のやうな家庭で、母から聖書を教へられた、其れでラスキンは幼き時から聖句を多く諳誦して居た、十二歳の

時には既に六回も聖書を通讀して居た、こうして育つたジョン、ラスキンは美術批評家としても社會改良家としても世に偉大なる人物となつた。「たらちねの庭の訓へはせまけれど廣き世に立つ基なりけり」で狭き密室で靜に聖書を教へ且つ祈るのが、子供を廣き世に立たしむる基礎づけである。

世に立つて押しも押されもしない様な人物を作るのには、岩の如き堅い精神を作らなければならぬ、岩の如き固き精神を入れるには、身體も鐵の如く鍛へなければならぬ、健全な身體に健全なる精神が宿る。だから可愛い子にも旅をさせろと云ふ、十六世紀の宗教改革の大業をなしたルータールの背後には嚴しい父があつた、徳富蘇峯氏は母堂が嚴しかつたと云ふ。其自叙傳に依ると「幼き時には父よりは寧ろ母の方が嚴しかつたやうに思ふ、余は決して其れを以て吾母を非難するのではない、寧ろ其爲に兎に角今日あるを致したものとて感謝して居る、實に吾母が余を愛する事が十であつたらば余を責める事は殆ど十五であつたと思はれる程嚴しかつた、或は手足を縛

られた儘、室にころがつて居たこともあつた』云々と書いて居られる、而も氏は四人の女子のみの所へ、父が四十二歳、母の三十五の時、同家の相續者として生れたのである故、一家の愛を一身に集めて居られたのであつた。然るに其如く厳しくなされたこと云ふは、實に豪い母堂であつた。殊に辨へない方ではなかつた、氏も論語などは母より習ふたやうに思ふて居ると云はれる位であるから、考へあつての厳しさ、一つの筈にも無上の愛が籠つて居たであらう。偉人には何れかの背景があるが、氏にも此貴い母堂があつた。

勿論物には調和がある、嚴に過ぎれば弊もある『すい子息辛らい親父に甘い母』と云ふ句もあるから、甘ま過ぎても辛ら過ぎても心の腐つた、すい子供が出来るから寛嚴宜きを得なければならぬ。家庭には男性と女性とが居つて、調和を得て教養が出来るのである。人には兩性を具へ給ふ神の全き性を具備する事は不可能だから、その兩性を有する父と母とが一つ心となつて、神の代理となり子供を教ゆるのである、母の

愛も父の嚴正な精神も幼兒の心に深く刻まれなければならぬ。聖書に『父なる者よ汝らの子供を怒らすな、主の薰陶と訓誡とをもて育てよ』(弗六〇四)とあつて主の教に依て育てる、是が育兒の秘訣である。教育家の泰斗ベスタロッチは云つて居る『神に全然信賴歸依する總ての感じの萌芽は、其本質に於て嬰兒が母親に對する信賴歸依の感じに依つて生ずる萌芽と同じものである』と云ひ、更に母は斯くして教へなければならぬ『母親は其子の兩眼に此考へが次第に起つて居るのを讀む、而して彼の女は可愛い其子を今迄よりも、一層しつかりと抱きしめて、子供には是迄聞いた事のない聲で、我が子よお前に必要な神が此世に在はずぞ、神はお前が、もはや私に用がなくなつた時、私が最早やお前を、かばふ事が出来なくなつた時、お前を其兩手に取り上げて下さるぞ、私がお前に喜びと幸福とを與へる事が、出来なくなると此時、其れらをお前に供して下さる神が此世に在はずぞ』と云ふて居る。是が母の務めだ、是れを教へられない子供は不幸だ、神なき子供は父母を亡ふと暗みだ、子供に能く神を教へて

置けば子も幸ひだが、逝く者も子を神に任せて安かに眠られる。残る子供も、『我が父母我を棄つるともエホバ我を迎へ給はん』(詩二十七〇十)と神を信じて堅く立つことが出来る。だから人は神を信じ且つ子供に神を教へる事が大切である。

教育の使命は神を教へることである、互に神を知得して居りさへすれば、自己も幸福、子も幸福である。互の上に如何なる事が出来ても、神と共に居れば安全だ。故に子供に能く神を教へ且つ正しく神に仕へることを學ばせねばならぬ。ペスタロッチは更に云ふて居る、『今迄は母親の爲に正しき事をなしたのと同じく、今度は神の爲に正しきことを爲すに至るのである、ここに於て兒童の獨立の感じの曙光と、神の信仰への傾向に依つて新に發展せる道德の感じとを結び付けやうとする母親の純粹無垢な心情の、此最初の企ての中に、確實に吾々を向上せしめんとする所の教育及び教授の必ずや留意せざるべからざる基礎が發露されるのである』と説いて居るが、フレーベルは、『吾々は先づ神から受けるものとして吾々の力、吾の精神を培養する事に努む

べきである。換言すれば吾々の生活に於て神を表現し、其れに依て總て地上的のものも亦、其要求が満足されると云ふことを知るべきである。吾々は神と人とに依て人間的の事物と神的の事物とに對する智慧と理解とに成長さすべきである。吾々は吾々の父なる神の所有するものの中に在り、且つ在らねばならぬ、又其中に生活し生活すべき者である事を知らねばならぬ、吾々は吾々の地上的存在及び總ての地上的事物に於て、活ける神の殿堂であると知らねばならぬ、吾々は吾々の父なる神が天に於て完全である如くに、完全たるべき者であると知らねばならぬ、而して此知識に従て吾々は動作し生活しなければならぬ、學校は實に此智識に迄、吾々を導かうとする者である。此爲に學校と教授とは必要とされるわけである』と云ふて居る。是が教育の精神である、神を教ゆる是が人を造を秘訣である。ワシントンの父は畑にジョージワシントンと草の種を播き其芽が發すると彼を導きて其れを示し、幼き心にも是は自然に生じたものでないふ云ふことを悟らせて、更に草でさへ自然には斯く生せぬ。天地も自

然に出来る者でない神の造り給ふたものである。と教へたさうである。ワシントンも野生ではない、小さい時から斯くして父に培はれて一大聖者となつたのである。スポルジョンも、『余が幼き小兒にてありし時、余は祖父の許に滞在しつゝありき、余が幼時の多くは彼處にて過ごされしなり、家族の祈禱會に余は常に聖書を讀むを以て例となせり』と云ふて居るが皆斯くして神と人とに造られるのである。子を其の道に従ひて教へよ、然らば其老たる時も之を離れじ。

#### 第四章 家族の孝心

家庭愛、人間進化の本である。儒教では孝は徳の本なり、教の由て起る所なりと云ふて、孝を人間教育の根元として居る、即ち父母の愛が子供の心に注がれ、其の底知れぬ深き愛に對して動く、愛敬の念、是れが孝の精神である。孔子は弟子が孝の道を問ふた時に『犬馬に至つても皆能く養ふことあり敬せずんば何を以て別たんや』と仰

せられた。だから孝は單に親を養ふと云ふことのみでない、孝は父母を敬ひ尊ぶことである。父母は永い經驗で神の恩を味ひ攝理を學び、而て其體驗を以て子を教へ且つ神に代つて神の愛を以て子を愛護するのであるから、其根本精神に對する、深い敬意が孝なのである。

基督教では次の如くに云ふ『子たる者よ、汝ら主にあつて兩親に従へ、是れ正き事なり汝の父母を敬へ是れ約束を加へたる誠命の首めなり。然ば汝ら幸福を得又地の上に壽長からん』(弗六〇一—三)と、父母を敬ふ是れが誠めの始めである、基督は『我れ新しき誠命を汝らに與ふ汝ら相愛すべし、』と仰せられて基督の教へ給ふた誠めは愛一つである、が其れを分ければ愛神と愛人との二つとなる、尙ほ細別すれば幾つにもなるが、基督教では大體十誠と云ふて十ヶ條に分て居るが、而して其れを又二つに分つて、一より五までを神に對する誠とし、六より十迄を人に對する誠となし、その父母に對する誠め即ち父母を敬へと云ふ誠は始めの誠めなりとあるのは、第一

の神に對しての誠に屬する第五誠にあるからである。其のわけは前に述べた如く、父母は神に代りて子を愛し又教へ育てるからである。父母は天の父の代理だ、神は愛なり、母も愛であり、母は我を忘れて子を愛す。母性は子に對しては無我の愛だ。母性は愛ほご純な者、美しいもの、貴いものはない、基督は愛の化身であつて世界人類の大なる母であるが、母性は小さい愛の化身である、母が子女に對する心情には、人が神に似て造られたと云ふ、面影が微かに窺はれる。母のみでない父も女性の及ばない心情を有して、共に子の教養に當る、詰り父母が一となつて天父に代つて子を愛護するのである。

父母は敬はねばならぬのである、勿論、事は理詰めのみ往くものではないが「教へねご子の摘んで來る土筆かな」で救が徹底すると自然自心が活動して、親に對しても愛敬の念が自然に湧く、知人の一信徒が入信後獨居して居る國の老父を心配して歸郷して父と共に行商を營んで居られた、が父が病氣づき老父の事とて永がびきて商ひ

にも出でられず、止むなく終に二里の路を町まで出て「孝に賣る心買はるゝ蜆かな」と云ふ句もあるが、其人は孝に毎夜按摩を取つて歩いた、而て其資で薬餌や滋養品を買ふて歸り、晝は日々看護に力め、病床で父が自分の身を倒れはせんかと心配してくれる程の熱く看護に盡した、愈々危篤に知人の實兄が來て父に「何ぞ要求なきや」と問ふた時、「何もない満足だ充分の世話になつたから」と云ひ、其後安らかに眠に就かれた、又一新聞記者の話に、母が他の人と話しをして居る所を隣室から聞て居たら、家の伴は人からも孝行者と云はれる故、私もさう思ふて居たが、實は伴は基督信者になつてから本當の孝行者になりましたと、喜んで語つて居られたこのことであつた。救ひは泉だ自然に愛が湧く、從て親に對する情が變つて來る、新渡部博士は「外國人の孝道」と云ふ題で左の如く書いたものがある。

……孝と忠とは日本專有の如く唱導されて居る、然ども實際に於て日本人が西洋人より孝を盡すかと云ふ問題になると勿論親に奉仕する或は親を思ふ念を計る事は今

日の心理學ではまだ標準がないから客觀的學術的に不可能であるとしても假に孝とは一心に親の幸福を思ふ念なりと定義を下し、此定義を標準として外國人（茲に外國人と云ふは我輩の最も多く交際して居る英米を云ふのであるが、他の歐洲人を悉く除外するわけではない）を測れば彼らに親を疎にするの念があるとは思はれない。我輩が留學して居た四十年前頃から今日に至るまで中流及び上流の外國人に交際しての觀察によると彼らが親を思ふの念は、寧ろ日本人より却て切であると思はるる節も決して少くない、但し彼らは親を思ふ事が義務なりとか何故親に恩を歸すべきであるか又歸さねばならぬかと云ふ様な理窟なしに、寧ろ親が感情的に慕しい老たる親に對して勞はる心持を懷くと云ふ情的に親の幸福を思ふ其心に於ては、決して邦人に劣つた點を見ないのである、若い男女が其親を養ふて居る時、之を苦とも思はず、従つて大に己を犠牲にして孝道を盡して居ると云ふ如き觀念が少い、親に貢する如きは一種の快樂と看做すが爲に軽く行はれる、従つて大した道徳とも思

はなげれば孝道を盡して二十四孝の中に入る者などは更に考へない、極めて平凡に戀人が其相手に贈物をしたり或は手紙を書くやうな心持だから他人から見ると別に孝道を盡して居るとも目立たない又親を養ふたからとて表彰されるわけでもなければ自らも餘りに自然の事を行ふので縁もゆかりもない他から褒めらるべき事と思はない。我輩の豫ねてより心安くして居る米國上院の議員某の家には二人の娘があつて二人とも性質こそ異れ相當な美人で學問も最良の家庭教師を聘して修めたので普通の科學知識なり文學上の修養もあり固い宗教的家庭に育つたので其品行も謹直である。其父は地方に於ける一大富豪と看做されたので二人が妙齡となるに従ひ幾度もなく結婚の申込みを受けたさうである。無論是れは當人から聞いた事でない然し母親が病身で一家の用務を見るには餘りに虚弱であつた、尤も家政の事務は親族の婦人に依頼も出来るし他に家政婦を備ひ入れる事も出来る、然し只二人の娘である故父親が彼女等を深く親愛してゐたのと父親も亦健康の餘りに勝れなかつたので



妙齡の彼女等は片端より結婚の申込みを拒絶して兩親に仕へて居た、我輩は此家に幾度となく招かれ或時數日間滞在して、聊か其内情を目撃したが兩親共に長壽した爲め令嬢も疾くに婚期を越えて、一人は七十歳一人は六十歳になつた。然るに彼等は決して自分らは親孝行したと誇りもしなければ又彼女の友人らも年老つて孤獨たるには同情するけれども親の爲になつた事は殊更に偉く持囃さない、即ち彼らの眼識では日本人の高唱する孝道を當然の事と看做して居て何も大した人に優れた行爲とも看做さない。彼らの標準から見れば、二十四孝など云ふ書物は只物笑ひの種子になるのみである、否彼らの目のみでなく今日我々が二十四孝の話を讀むと牽強附會の點が多きのみならず、其人物の動機に於ても甚しく怪げなる點あるを發見する國際聯盟事務局にも二三百名の若い婦人が各國から集つて來り書記的職務に従事して居るが現に我輩の手許に五六人の婦人等より直接に家庭の状態を聞いたり、或は彼女たちの友人の事情を耳にしたりすると彼らの中の夥しい割合は父なくして母を

養ふて居るとか、又父があつても病身其他の理由の爲に一家を支ふる力なき故に、彼女らに意中の人があつても結婚することなく俸給を割いたり、内職したりして父母を養ふて居る者の數が夥しい。

右は送金の事であるが更によく彼女の心理を窺ふと送金を以て彼女らの義務を盡したと思つて居ないらしい、否送金は第二次的義務であると思ふて居るらしい。彼女らが一週間毎に或は日々に親の許に文通するを以て一種の快樂と心得て居る者の多いのには、是亦驚かざるを得なかつた、か程に親を思ふ念の深い事を恐らく邦人には殊に一時的旅行などした邦人には到底窺知し得られない事と思ふ、何故かなれば我輩の如く相當親密に交際した者ですら、折々は彼らの家に泊り或は共に旅行する者でさへも彼らの親に對する話しは、めつたに耳にする事がなかつたからである。彼らは親に事ふることを以て一家の事であつて他人の關はる事でないと思ふ故になかなか他人に一家の内情は語らない。

右の話によれば親孝行は女性にのみ限る如く聞かれやうが我輩は男子に就いて同様の事實を數多見た、我輩は國際聯盟事務局（はんめいじむきょく）を去る前日、各局の局長及び課長の人々を其室に歴訪して別れを告げた。其時課長の一人で嘗て某國の外交官を務め大戦争には、少佐として出征し相當の働をした若者の室に行き別れを告げんとしたが折り悪く其室内には二三の訪問客があつた、所が彼れは我輩の入るを見るや直に起つて客に一時の退出を乞ふた、我輩は之を見て奇怪に思つた、只形式的グッドバイを述ぶる積りで行つたのに彼れが如何にも業々しい態度を取つたので却つて事務の進行を妨げて氣の毒であると思ひ「諸君退出するには及びません我輩は半分程握手すれば事足るのですから」と云つたが彼は其人々の退席（たいせき）を乞ひ、グッドバイを云ひながら我輩の手を取つた儘、低い震ひ聲を以て「新渡戸さん私は豫てより一言眞情を述べ度いと思ふてゐたが今迄之を述ぶるには餘りに怖氣で口外し兼ねたが君と奥さんが私の母の生前に親切をされた事は私の生涯忘れ難い所で、此心は文字に現はし得

ない口を以ても盡されぬ只如何に深き感謝の念を胸中に藏してゐるかだけを覺えて居て貰ひ度い」と我輩も此期待せざる言葉には只涙を以て答へるの外なかつた、さりごとてまだ他に訪問すべき局長課長もあることなれば、眼を赤くし度くないと思ひ無言に、握手して匆々室外に飛び出した。

此人の母と云ふのは、若い時から寡婦となつて二人の子を育て上げた、一人は今印度にあつて重要な官職に就て居る、此婦人は英米佛獨西の語學に特に堪能であつた爲に、聯盟事務局の若い女達の母と稱せられた立派な性で、屢（しばしば）日本の話しをする毎に、日本の國情を理解するには我輩は敬服してゐた、其子たる課長は、眞面目（まじめ）一方であると同時に恰（たい）の譽れがあつた、爲に局内にあつて重きをなして居た、表面冷靜一天張であつて斯くの如く親を思ふの念の深い事は我輩も其迄知らなかつた彼の同國人なる友人間でも彼の情愛の深きを知る者は少なからう、尙ほ彼と其兄とは共に既に四十歳を越えて居るに拘らず未婚であつた所以も右の事情で明になつた。

このことが書いてあるが、西洋の人は親子の間、夫婦の間の事情などは語らぬが、深く熱い愛敬がある。

而て凡ての事に於て親を喜ばせ度いと云ふ心が働いて居る、孝經に「身を立て道を行ひ名を後世に掲げ以て父母を世に顯はす孝の終り也」と云ふてゐるが、ガーフキールドが、大統領に當選するや一番先きに母に知らせ、其授任の演説をなし其式が終るや直ちに母と妻との席に往き、大衆の前も憚らず喜び涙に咽びて接吻せしと云ふ程である、尙ほスコットランドで百名の成功者をあげて、斯る人物はごう云ふ家より出るかど研究した結果其百人の中の、六十人が牧師の家庭より出たのであつたと云ふてあつたが、支那流に云へば是れらの人々も孝行者であるわけだが、別に譽め立てもせぬ、が活る神の愛が注がれると凡て事が可能となる、従つて父母にも孝が出来る、信があれば孝は自然に出来る。

## 第五章 家庭の支柱

忍耐はして見事なり雪の竹、であるが忍耐はして美しいのは家庭中だ、而して勸忍が出来ずして、なして醜いのは夫婦喧嘩である、家庭の和は只忍の一字にある、一家の興敗は忍の一字を守ると守らざるところにある「腹立ちし時は此の世も後ちの世も人をも身をも思はざりけり」で少の虫の居所がわるいと人は殺し合ひまでもする、短慮は家の禁物だ、殊に家庭は短氣が一番の害が、家にに何はなくも忍さへあれば永くも續き榮へもする、忍は草木を濡す水の如く、隠れて居て一家を脈はし榮へしめる、基督は「我に従ひ來らんと思はば己を棄て日々己が十字架を負ひて我に従へ」(路九〇廿三)と仰せられた、信徒の生活は日々十字架の生涯だ、即ち忍耐生活だ、忍耐の必要は誰れも知つて居るが其れが出来ないのである、だが基督に従ふ事に依つて其れが可能となる、「抑へても勸忍囊なかりせば何にか入れん痼癩の虫」と云ふ歌もあるが、

忍耐力が強くなつて、如何なる事にも耐へ得られるやうになる「我は如何なる狀に居ることも足る事を學びたればなり我は卑賤とほしきに居る道を知り富とろに居る道を知り又飽く事にも飢うる事にも富む事にも乏しき事にも一切の秘訣ひけつを得たり我を強くし給ふ者により凡ての事をなし得るなり」(腓四〇十一—三)とは、使徒パウロの體驗である。基督に依ると強くなる力を與へられる、基督者が凡て事に堪へるのは此神秘力しんひりきの存する故である、人は皆此力が必要である、爲にエスは日々十字架を負ふて暮らせと仰せられるのである。

而して一家の事業でも世の大業でも忍耐を要せざるものはない、忍耐なくしては何事も成就しない、殊に事業には困難もあれば蹉跌さたつもある。だから其の困難にも堪へ失敗をも挽回する堅忍がなければならぬ。事をなすには一致の精神も要するから家族も共に惱みに堪へる堅忍がなければならぬ。仮令たとへ獨り主人に堅忍持久の意力があつても夫人に其の精神が乏しくしては、大事の達成は期し難い、或る商人が事業失敗の結

果一切を投げ出だして、全くの無一物となり悵然てうぜんとして家に歸り、妻に對して其由を語り今回は全くの無一物となつたと嘆息たんそくを漏らした、妻は聞て「何もなくなつたと云はるるのですか」と反問したので、更に實際凡てを投げ出だして仕舞ふたのであるから全く何もないのだと云ふと、妻は「何もないと云ふことはありますまい。茲に私もあるではありませんか、又子供もあるではありませんか、ですから力を協あはせて共に働きませう」と勵はげまし、心を合せて働いたので、忽ち其失敗を挽回したと云ふ美談があつた。家庭には此同情の籠つた共同の忍耐が必要である。

殊に忍耐は大なる事業に於てのみでない、子供の教養にも必要である、スサンナと云ふ婦人は忍耐強い女性で、根氣強こんきつく繰り返へし繰り返し、何遍もなく子供に本を教へて居るのを、良人ちやうどが其れを見て不審ふしんに思ふて居ると、夫人は、「でも二十遍教へて覺へる事の出来る學課を、十九遍で止めて仕舞うのは惜をいではありませんか」と云うたこのことであるが、こうして教へられた賢母の下より、メソヂスト派の祖たる偉人

ウエスレーが起つた、子の教養にも忍耐を要す、殊にモニカは深い忍耐を以て良人の子の爲に祈つた、而も子の爲には二十年も祈つた。二十年の祈りは聞かれて其子オーガスチンは單に放蕩が止んだと云ふ斗りでなく。眞の聖者となり、中世紀に於て哲學神學の大家と仰がるゝ人物となつた。世を動かすは信より出づる忍耐の力だ、忍耐に依て生み出だされた、オーガスチンでも、ウエスレーでも今尙世界の人々を動かすつゝある。

大正十四年九月九日のことであつた、ト部尠夫と云ふ人が、我が家を訪はれた、同氏もオーガスチンと同様二十年も家族を泣かした人であつた。此日私より同氏を尋ねんと思ふて居たが、或る牧師の來訪されて話して居たが、其牧師の歸らんとして居らるる所へ、同氏が夕方來訪された。手紙も受けて居るので御話しし度ひ事もあり丁度好い時であつた、と云ひ居る間に、不斗此人には基督教を一通り話した。が分らぬ信仰が起らぬと云ふて居られる。だから十字架の力が働かなければ如何に話しても無

効であると言ふ考へが頭に浮んだ、で直に聖書を開いて、コリント前一章十八節の「それ十字架の言は亡ぶる者には愚かなれど救はるる我等には神の力なり」との聖言を讀み尙ほ以下を讀み大意を説いて祈つた、所が氏は流るゝ涙をハンカチで抑へて頭を上げられず、十分も其儘黙して居られたが漸くに涙を拭ひ、風呂敷より菓子あたまの折を出だして置いた儘、目を眞赤にして立ち去られた。

それで心配した、何が瘡しやくに障つたのであらう、が神の言葉を讀み且つ語つたのであるから、神が解いて下さるであらう、と我と我が心を慰めて居り、其後も、氏を訪ふたが逢へなかつたので、自分は葺合の教會へ往く事となつたので終に別れも告げずに神戸に移つた。

ト部尠夫氏は姫路に居られたのであつたが、福山市の附近の人で、父は廣島縣の縣會議長も務め家は資産もあつたが氏は飲酒家で酔ふと一切何でも人にやつて仕舞ふ酒癖があつて如何にしても其れが止まぬ故、父も終に禁治産とされた、が其後も父は改

めるとさへ云へば禁を解くと一再ならず云はれながら其の諭しも受けず、長女が生れると家を出で、其娘が二十歳になる迄家に歸りては産を持ち出だして二十年放浪生活を續けて居られた、で夫人は長女の外に尙ほ一男一女が生れたので三人の子供を教養して居られたが氏は歸つては金を持ち出だすので家には惱みは絶へなかつた、終に基督の教を聞かれて、夫人も娘も信者となり、且つ一心に祈つて導いて居られた、私も導き且つ祈るやうにとの手紙もあつた。

がト部氏は其後間もなく東京に往き、而して基督に救はれて信者となる又は愈々バプテスマを受くると云ふやうな通信が屢々あつたが、信者となつて餘り間もなく、翌十五年の一月は福山市の家族の許に歸られた、歸つてからは毎朝五時に家族で祈禱會をして居る、全く奇跡だから是非一度來て見てくれと云ふ、手紙をも度々受け。屢々の招きに、其五月に同家を訪ふた。

が逢ふて眞に其の奇蹟に驚いた、と云ふのは感謝の涙に咽びつゝ、氏は當時を語つて

昨年九月伺ふたのは自殺する決心で御別れに往つたのであつた、其れは教へを聞いても信仰は起らず、酒も止められず、又何と説いても女が別れてくれず、最早や此儘の生活に居るのが苦しくなり、斯る苦しく生きて居るよりも、死ぬ方がよい、自分が死ぬならば、妻子を永く泣かしめず一時で諦めも附くであらうと。固く自殺を決心して御別れに往つたのでありました、其れに坐すると、『其れ十字架の言は亡ぶる者には愚かなれども』と云ふ語を聞いた時は。神より亡ぶるものは愚かと云はれたやうに思はれて死ぬ事が出来なくなりました、行詰つた身體他にどうも出来ぬので、只止めどなく流るゝ涙を抑へて居りましたが、斯の時心に、神が死ぬなど云ひ給ふのなれば、何とか道が開ける時があらうと思はれたので涙を拭ふて歸りました。然るに其夜から心が變動して言ひ得られぬ悶へ悩み、眠れば苦悶で、爲に覺へず叫び、それで隣人を何度も驚かすと云ふ心の痛み、其れから不思議に酒も止み杯に手も觸れず眞面目になつたので。共に居た女も諦めて別れ話しも調ふて、東京に往くこととなり以來神の恩

みで、救はれて信者となりました、家では聖書學院に入れて修養させる考へであつたが、私は一月に家に歸へつて來ました、で歸つた時には誰れも信用する者はありませんでしたが、實際救はれて居るのでありますから今日では、皆喜んでくれるやうになりました」と、涙を流しつゝ語られた。

其時長女の方も「お父さん程變つた人は他に見ません、牧師も宣教師も、とてもお父さんは直らぬと云ふて居られました、其れが變つて、母に對し私たちに對し本當に別の人のやうになりました、」と救の力を稱へて居られた。ト部氏も亦其の救はれた時の恩みを證して多くの人を主に導いて居られるが、一生の間何回でも此の救はれた年續けて居られるから是の事を書いてよいかと問合せた返事に、

御申越之儀、實に勿體なく存じます、御榮えの爲めでしたら何れになりましたも素より異存は御座いません、何卒自由に御使用願ひます。普請も大分捗りましたか

ら來月位は一度御遊びに御越しを願ひます何れ其節は御案内致します。

とあるが、田舎より福山の市中に家移して改築中であつたが、人も救はれて新になり、家も新しく改築され、家も人も救ひの力で全く新しくなつた。二十年間の忍耐、夫人の祈り、子たちの信仰は祝されて、暖い春のやうな家庭となつた、永い間の苦しみは人の味ふことの出來得ない恩みとなつて現はれて、一家、眞に感謝に満たされて居られる。

忍耐も必要であるが、又犠牲も必要である、大木の下には草や木の葉が犠牲となつて腐て居り、大魚には小さい魚が犠牲となつて腹を肥して居る、家でも社會でも犠牲がないと發達がない、特に人間には自然界以上の犠牲が必要である。弱が強の犠牲になり、小が大の犠牲となるのでなく、弱い婦人や子供の爲に強い者大い者が犠牲とならねば、人は安全に暮らせぬ、基督の仰せられた、「首たらんと思ふ者は汝らの僕となるべし。斯の如く人の子の來たれるも事へらるゝ爲にあらず、反つて事ふることを

なし又多くの人の贖償として己が生命を興へん爲めなり』(太廿〇廿八)と、云ふ此の高い潔い犠牲が必要である、だが人は利己主義だから、心から人の犠牲になる者は少い。罪なき神の子イエスが罪ある者の爲に十字架に犠牲になり給ふた、其救ひに預つた者にして始めて弱い者小さい者の犠牲ともなり得られるのである。此高い犠牲がなければ人間社會は進まない、女や子供を犠牲として楽しんでゐる野蠻社會は進歩しない主の犠牲なくしては社會は進まぬ、子の爲に犠牲となる事の出来ぬ者は親たるの権利はない。高い犠牲がなければ人は幸ひでない。

古い話ではあるが基督教の新聞に左のやうな記事が載つて居たから其一例に茲にあげやう。

金鐵も熔けるかと云ふ三伏炎天の或る日曜日の事であつた、亂褸を着て見苦るしく老いた乞食が道に卒倒した儘前後も分らなくなり、カンカン照る日に打ち曝されて實に憐れな有様であつたが、多くの人々は基督のよきサマリヤ人の御譬にある如く

通り過ぎて誰れ一人見返る者もなかつた、其處を暫くして十七八歳の令嬢が通り懸つたが、此令嬢は身に海老茶の袴をつけ手に四六版大の袱紗包みを持つて居た、夫れを見るより此の令嬢は其の乞食の老人の側に寄るかと思ふや、手をかけて油汗を流しながら此の老人を抱き上げて、彼方の木蔭に運び更に老人の顔のあたりに洋傘をきせかけて置いて此の暑さも厭す何處へか、一目散に走つて行つたのである。暫くして此の令嬢は薬瓶を片手に提げて歸つて來た、此の時見物人は山の如く乞食を取り巻いて居た、見物人を押し分けて少女は再び乞食の身邊に坐し乞食の顔の玉なす汗を己が雪の様なハンカチで拭き、薬餌を彼れに與へ、而て乞食が氣のつくのを待て、彼女は再び教會出席用の聖書の入つた袱紗包を取り上げて去つて仕舞つた。どあつたが路傍に倒れて居る病人は健康な者が救濟しなければ助からぬ、家族でも弱い者を、強い者が保護し、小さい者を大きい人が助けられないでは人生の幸福はない、小さい者には大きい人が犠牲となり、分らない人を、分つた人が助けるので、家も社會



も幸福があるのである、幼くして父を亡ふた、ロイド・ジョージも、叔父のリチャードと云ふ人が犠牲となつて助けたので、英國の總理大臣の位置まで勝ち得られたのである。

幼児は大人の犠牲を要し、病者は強壯な人の犠牲を要す、家庭の悩みに於ても同じ理である、救はれた者が、救はれて居ない人々の犠牲となつて、始めて一家にも救ひが徹底するのである。或る青ざめた生氣の失せた色の夫人が橋の邊りに立つて居たが丁度そこに親しい信者が来て、其様子に驚いて、「あなたの平素の心配は知つて居ますが、特に今日は生れた人のやうでない様姿、何ぞ又心配なことでも出来たのではありませんか」と強ひて尋ねたので、其の夫人も包まれません、凡てを打ちあけて「實は御存じの如く親戚の間柄で出るにも出られず、私が居れば家が治らず、考へ詰めた末、入水を覺悟して此處に來たのであります」と一切を語られた、それ故其の夫人に、「始終基督の犠牲を話して居たではありませんか、同じ者なれば、家に歸つて家に於て良

夫の爲めに犠牲となつて死んだ方がよいでは御座いませんか」と勧めたので、其の夫人も深く悟つて既にそこで死んだ者である、思ふて其の死を負ふて家に歸つて。何事を云はれても氣にもかけず、只過失は誰れのも一切自ら負ふ死の生活して居る間に一家に平和の春が來たといふ話しがあつたが、人を世に勝たしむる者は救ひの力だ。

## 第六章 家庭の信仰

信は世に立つ者の何にも勝る足である。人は信なくしては世に立てぬ、子貢が孔子に政を問ふた時、孔子は『食を足し兵を足し民之れを信ず』と教へられた、子貢は尙ほ『此の三つの中で一つを去つても差支へないものは何れであるか』と尋ねた、孔子は『兵を去れ』と云はれた、更に残る食と信との中『止むなく取り去らば何れを去るか』と三度び尋ねた時、孔子は『食を去らん、古より人はみな死する事はある、民は信なくしては立たず』と仰せられた、智があり力があつても民に信を失ふては政治

は行はれぬ、人が信を世に失ふは公生涯の死だ。人は主義信仰に生きなければなぬ。特に大切なるは神に對する信である、神に對して信仰の熱い人は世の人から信用される人である。

だが科學過信の結果、無信仰無宗教の人が多い。一人の辯護士の方で、科學萬能主義を固く取つて、科學を全能力のやうに思ひ、科學の力さへあれば不可能な事はない病でも科學の粹を集めた醫術を以てすれば、何らの病でも難治はないと確信して居た。が自身が病氣となつて、永く醫師にかゝつて居たが、其効が現はれぬ斗りでなく藥が過ぎて其爲め却て病氣を重くし。科學の萬能にも疑を生じ、同時に前に道を聞いて居た信者より更に教を聞いて入信したが、心にも平安を得、健康にもなつたと喜んで語られた方があつた、併し尙ほ今日でも信仰無視の人も少くない。

が其れは科學過信のみの罪でない。宗教家も其責めを負はねばならぬ、と云ふは信にも正信と迷信との別がある、而て誰れでも正信を蔑視する者はない、新島襄、片岡

謙吉、本多庸一諸氏の如き正しい信仰を侮蔑する者はない。信仰が輕視されるのは迷信の存する爲めである。だから迷信は宗教の敵だ、迷信あるが爲に宗教は無視される。併し信仰は強い者だ。如何に攻撃されても人は信仰を捨ぬ、信仰は人生の自然だ、人は自然、生れながらに信仰を以て生れるから、人が世に生れる以上は人の信仰は止まぬ、而して人が正しい信仰を見出ださぬ以上は迷ひに走ることも止まぬ。

誰れでも信する心はみな一つであるが、其信の向け方で、正と迷との差が起るのであつて、凡てが一つ正しい方向に向へば信仰は改善される。元來信仰は一人角力ではない、信づる者と、信せられる者との對立があつて、自力宗と云ふ禪宗の寺でさへ、何らかの信仰對象が祭られてある、目には色の對照ある如く信には信の對象がある、而て人が信奉するのであるから、其の對象は人間以上の者でなければならぬ、鰯の頭も信心からでは當を得た信仰對象ではない、淡水のマカイ教師の宅で臺灣の多くの人に永く信じられて居たと云ふ、鹿の頭を視せられたことがあつたが、世にさう云ふ信

仰があるから宗教が蔑視されるのである。だから宗教家は信仰の對象に、無頓着であつてはならぬ、殊に人心には判断の力がある、而て判断の作用は、物の可非を評價することである、更に云へば是か非か、良か不良か判別して其の良さを撰び取るので、即ち良いか悪いかの二つに分つて其一つを撰ぶのであるから、二者撰一の精神作用である、人はみな此の作用がある、で米の良否とか衣の醜美とかの撰擇のみでなく、大切な信仰對象をも撰ばねばならぬ。殊に人には道德心もあれば美術心もあり、究理の念も、宗教に對する聖の憧れもある。信仰對象は、眞善美聖を凡て全く具備し給ふ者でなければならぬ。

而て信仰對象には大體三つの別がある、即ち一神、多神、汎神の三教である、多神とは神が多くあると信するので八百萬も神があるとすると、神道は其れである。汎神とは萬物凡ての物を神とするので萬有神教とも云ふが、佛教は其の信仰である。一神教とは天地には神は唯獨りと信するので基督教の信は其の信仰である。

基督教では天地には唯一柱の神の外には神は別にないと信する、凡て物でも人でも皆神に造られたもので神ではない、神のみが創造者で人でも物でも神に造られたものだ、世に存する眞でも善でもみな神より發出したものとし、神を全知全能凡ての性を完備し給ふ者と信する。老子に「道の道とすべきは、常の道にあらず、名の名とすべきは常の名にあらず、無名は天地の始め有名は萬物の母なり、」と云ふ語もあるが、明治帝の御製にも『目に見えぬ神の心こころに通ふこそ人の心こころの誠まことなるらん』と御歌のある如く、神は人の心の如く目には見えぬ者だ、が目に見ゆる萬物は目に見えぬ神が造り給ふたものである。老子も名もつけ得られない無名より萬物は出で來たものであるとし、名の有る萬物は無名から生れたものであるとして居る。

神は目に見えぬ者で、名もつけ得られぬ絶対無限の者である。目に見ゆる者よりも目に見えぬ者に貴重貴重の點が存する。人間も身體よりも精神の方が貴い、目に見えぬ心の働働ききに價値が存する。此の心の働働ききが物を造るのである、近來能く用ゐらるゝ語の

創作即ち心作用には創造の働きがある。文學の大著や、ラヂオや飛行機が創造された、見ゆるものは見えざる精神に造り出だされる。だが我々の精神には限りがある、だから如何なる人でも天地を創作することも出来なければ、又此の大宇宙に對しては、どうする事も出来ぬ、人には人の分限がある。が神は無限だ絶対だ、此の絶対無限の神のみが萬物を造り給ふのである、見えぬ心が物を作る如く、見えぬ神が、見ゆる天地を創造し給ふたのである。西田博士も意志の創造作用を、進めて始元はじめに神天地を創造し給へりと云ふ點にまで論及して、『我々の世界は當爲たうみを以て始まるのである神光りあれと云ひ給ひければ光ひかりありと云ふやうに世界は、神の意志を以て始まるのである』と云ふて居られる、世界があつて神が出来たのではなく神があつて天地萬物が出来たのである。

神は天地萬有の創造者、天地に唯獨りの全能者であり、善の根元、愛の淵源ねんげんである。信仰が此の神に向ひさへすれば人の心は自然に活きる、小林誠一と云ふ人は大正七年

に二十一歳の時俄に明を失ふて、病院にも入り、種々治療にも努めたが、効も見えなかつたので、神信心を始めて一心不亂に神々を念じ、而も不自由な盲人まうじんの身で、播磨の揖保村ひほむらから京都の鞍馬くらまの奥おくにまでも往つて猛烈に荒業あらいふを行じて懸命に祈つた、其れも何度か往つては一心に念じたが何らの効驗もなかつた。餘りに熱烈に修行もし祈禱もするので、人に祈禱を依頼される様になり、熱心に祈つてもやつたので、依頼者が漸次に増して來た爲め、大正九年一月の二十五日には、扶桑教の管長事務取扱男爵藤枝雅之氏より權中講義に補せられ、終に扶桑教の祈禱者となり、更に翌十年二月十一日の日附にて、扶桑教の權大講義に補せられ、法相宗大本山藥師寺呪師部管領已講僧正稻谷等海氏より、行法加持祈禱差許候事の證を得て、立派に一個の加持祈禱者となつて、龍野の町に一家を構へ依頼に應じて人々の爲には一心に祈つてやつて居た。併し自己の心には少しの平安もなかつた。

大正十一年三月のこと、妹の親しい友である福井みつ江と云ふ看護婦が訪ねて來て

一泊された、而て自分の失明であることを同情してか、不思議な程親切に朝起きると洗面のことまで。凡て行届いた世話に感じて居る上に翌日は妹が他に往くので自分を連れ出る者が無いのに特に其の日は多くの者が會して護摩をたく日であつて自分も是非往ねばならぬ、處が其の姉妹は其の日留つて、此の盲人の手を引いて其の式場に往き大衆の中に拘らず一切の世話をして、歸りには病院で聞いた時、楽しく思ふた、二百番の讚美など歌ひつゝ愉快さうに家に連れ歸られた、それで驚く斗り基督信者の親切を深く感じて、どうかして基督教を聞き度いと云ふ心が止み難く湧き起つた。

處へ丁度自分の居る前の旅館に三人の聖書販賣の人々が泊られた、で早速に聖書を求め、尙ほ三人の方よりも教へを聞き、其人々の親切にも亦驚いた、更に牧師の前田氏よりも親しく導がれて、救ひも分り信仰も進み、神の恩みに依り、愈々大正十一年八月二十七日に信者となる運びとなつた、が其前日に親切な友人が來て『信徒となるのは結構だが、盲人の身で職を失ふては直に困る、他に職の道を開いてからでも宜い

ではないか』との注意であつたので是には心の中迄も眞暗になる程に悶え、而も司式の爲に吉川先生は既に見えて居るので、只茫然自失暫時室内を何回となくウロウロ走りまはつて悶へて居たが、同情の忠告ではあれど、既に一旦約した事であるから、決然立つて其の日吉川牧師よりバプテスマを受けて信者となつた。

而て其年神戸の盲學校に入學し、多くの戦ひもあつたが神に依つて凡てが勝利に歸し、同窓の友をも神に導き進級試験も受け、一年早く大正十四年には卒業する事を得て、四月には姫路に開業し、同時に盲人會の吉益隆三郎氏と謀つて共に盲人講習所を創設して盲人教育に盡し、家には常に五六人の盲人を置いて教養して居られる、内助にも看護婦の方を夫人に迎へられ、家庭も平和で仕事も忙しく事業も益々榮へる。

殊に感心なのは菊野と云ふ末の令妹である、小林氏は青年にして失明されたのであるから、誰れかの助けなくしては外出は出来ぬ。それで開業の時に令妹を同伴された、其時まだ十六歳の少女であつた、が阿兄の世話をよくされて、療治の際でも學校

にでも教會の集りにでも外出には一切送り迎ひをされ、家に於ける阿兄の世話は勿論家に居る盲人五六名の洗濯の世話まで一人でなし、其上に毎月月末には盲人會の會費の集金に會員の家々を廻り、其の帳簿、家の會計少女の身で一切なし、而て尙ほ自分分は看護學を學び又産婆學校に於て學び、兩方、卒業證書を得られた、其の多忙の中でも少し暇でもあれば阿兄に新聞を讀んで聞かせると云ふ兄思ひであるから、小林氏も實に良い妹をもつたと喜んで居られる。曾ても氏を訪ふた際、前に述べた聖書販賣者の中の一人で、田賀と云ふ人が來て居られたので、三人で話して居た、が田賀氏は外出の用意に起つて靴を磨き始められた。夫人が其を見て取つて磨いて居られたが、又其れを令妹が直に取つて磨かれた、一事が萬事此の筆法だが、殊に現在今日の世に人の靴など磨く令嬢が今何處にあらうか、小林氏も良い妹を有つたと云はれるが、氏は實に珍しい令妹をもたれたと私は思ふた、斯る家族の集ひだから家には平和圓かに満ち、外にも溢れて流れ、廣がる評を早くも操觚者は聞きつけて元と居た龍野の新

聞は氏の成功と、氏が能く二人の妹を立派に仕立て上げたことを盛んに書き立てた、實際一家共に神を讚美し感謝の満ちた恩みの家である。

同じ信仰でも其の對象が變ると斯く全然別天地を現出する。氏の平らかでなかつた心も満ち溢れて周圍の人までも満される。眞にエスの救ひは活ける泉だ、湧いて溢れる。だから誰れでもイエスを信すれば等しく力を得られる、オーガスチンも九年間熱心にマニ教を信じた、が満されぬ、で自己も不満、母も尙ほ九年間は泣いて祈つた、が、其信仰が學理に合はぬ事を見出だして、マニ教に疑念を生じ終に左の如く云つて居る。我は全然マニ教者より分かれず、何等之に優る物を見出ださざる煩悶よりして我が前に尤めたりし如き結論を以て、猶一時満足せんと心を定め、以て他の好ましき宗旨の我が眼を啓くを待つこととせり。

是に於て多く人に必死の畏なりし彼のファウストは、思はず知らず從來我を捉へたりし其の畏より我を解き放ち初めたり、そは神、爾の不思議なる攝理の手を以て吾

が靈魂を賣わたすことを禁じ給ひし故なり、且つ涙と共に濺ぎ出だせし吾が母の心血、日夜我が爲に献げられたり、爾は不思議なる秘密の方便を以て我を待遇し給へり、嗚呼是れ爾の爲し給ふ所なり、そは人の足歩は主なる爾に由て定められ、爾自ら其の道を選び給へばなり、吾人の救極の意義は何ぞや、爾の手其の造りし者を再造することの外なし。

と、彼れも神の攝理に依つて再び全く改造された、心は自然満ち足りて來た、其の體験を語つて『爾我らを爾己の爲に造り給ふ、同時に又我らの衷情は爾に於て憇ふまでは安息を得ざるが故なり』と安きを得なかつた彼の心も眞の信仰對象に歸つて始めて安息に入つた。

正しい信仰對象を得ない間は、人生は迷兒同様不安は免かれない、併し迷羊も牧主の下に歸れば安全だ。人は皆天の父に歸らなければならぬ、だが歸るには歸るべき道がある、長上に對しても敬ひがある、神に對しても禮がなければならぬ。聖書には『

今にても汝ら斷食と哭泣と悲哀をなし心を盡して我に歸れ』(耳二〇十二)とは神の言葉であつて、是が神に歸るの道である、神を離れた罪を悔ひ、出來得る限りの心を盡して神に歸るのである、十九世紀の大説教家スボルジョンにも罪の悶へがあつて、其悩みより救はれた時の體験を左の如く語つて居る。

如何にして吾が罪を救はるべきかは、吾が全力を竭くして知らん事を希ひし一事なりき、彼らは一人も是れを告ぐる者あらざりき。余は憐むべき罪人が如何にせば神の怒りを避けて平安を得べきかを知らんと希へり。然れど一人も吾が爲に其の導きをなす者なかりき、彼らは云へり『汝自ら欺く勿れ神は僞るべきにあらず』と是れらの語を聞いて心實に刺さるゝ如くに連月懈らず會堂に至りて救ひの語を聞きたり、或時吾は『義者の光榮』について説くものありしを聞きしも是らは吾に満足を與へざりき、吾は實に主人の臺の下に在りて殘屑の落るを待ら求むる憐れなる犬の如き情態に陥りたりき。其の人の膳より善き食物の細片が落ち來たる時を、今か今

かど待ち望みつゝ、多くの月日を過ごしたり、されば常に祈りて切に求め而して後ち會堂に往くを例とせり、其の集りに臨むや數千の聽衆ありたらんも、恐くは吾が如く意を注ぎて其の教へを聽し者あらざりしならんなど自ら信じたり。終に吾が爲に光明は反射し來たりぬ、或る雪の降る日、吾は大雪にも拘らず往きて聞かんと欲し家を出でしが雪の爲に餘儀なく最近の會堂に入りたり、暗き街衢は吾が前に横はれり、こゝを轉じて小さやかなる會堂のありければ吾は即ち入れり。是なん熱心なるメソヂスト教派の集會にして、多くの人々は聲を揚げて熱心に歌ひ居たり、其喧しき事、人をして頭痛岑々たらしむ。然ども吾は少も頓着なしに其教を聞き靈の救ひに就て知る事あらんと思ふものから、些少の頭痛位は厭はざりき。斯くて其の席に連ること暫くして説教者の出て來たらんことを待ちしが、稍々ありて一人の瘦せたる人、壇の上に現はれ手にて聖書を披きながら、『地の極てなるもろもろの人よ汝ら仰ぎ望め然らば救はれん』(賽四十五〇廿二)と讀み來りて、其の眼を吾の方に

注射しつゝ、吾が心の中の憂ひる察する者の如く一聲高く叫んで曰ふ「青年よ、吾は汝の深憂を知る、汝若し救はれん事を願はば基督を見よ」と兩手を高く擧げて、「見よ見よ唯だ基督を見よ」と呼べり、我れ是を聽きて靈の恵みの雨の沛然と注ぎ來るものあるを感じ、從來の疑ひは雲の如く散じ電の如く滅し去れり、是と共に救ひの光明は輝きて我を照らすに至れり、我は覺えず胸を撫で歡の涙に咽び、其後は唯恍惚として彼が何を語りしやを解せざりき。

と是が其救はれた時の状態である。基督教では罪と云ふ事をよく云ふが、基督教は單に神のみを教へる宗教ではない基督教は贖罪の宗教である、而て人を罪より救ふのは唯だ基督の十字架のみである。「天の下には我らの頼り頼みて救はるべき他の名を人に賜ひし事なければなり」(使四〇十二)とありスボルジョンが靈界の偉人となつたのも罪の惱みと其の救ひがあつたからである。

救ひはエスを凝視することであるが、眞の信仰も基督に依て起るのである、佛教で



は聞と云ふ事を説く、如是我聞と云ふて是の如くに我れ聞くと云ふ事が信の因となるのである、が其因に誤があれば果に迷が生ずる、だが人間が信奉するのであるから人間以上の者の言でなければならぬ、全き神の言でなければならぬ。だから基督は神の言葉の現れであつて、即ち父なる神の意志を傳へる言葉である、而て何れの宗教も神の御告げと云ふことより起るのである。宗教には神の黙示がある天の啓示がある、基督教は天の黙示に依つて起つた宗教である。殊にイエスは其の啓示の絶頂に現はれた者である。啓示は神が人に自らを現はし給ふ一つの方法であり、自分の意志を傳へ給ふ言葉であるが、基督は其の神の言葉の現はれである。ヨハネは「言は肉體となりて我らの中に宿り給へり我ら其の榮光を見たり」(約一〇十四)と云ふて居るが、人の心は其人の眞實の言葉が自分の心に宿つて人の見えない心も能く分る如く、言、肉體となつて我らの中に宿つて、見えざる神が明かに分るのである、印度の聖者サンダーシングも「神は人を助けんとして受肉し給ふたのである。生命の言が肉體となつて此の

世の河を横ぎつて天に達せんと願ふ者を運び給ふ「我を見し者は父を見しなり」我らイエス基督の受肉の中に生ける父を見る事が出来る」と云ふて居る。聖書にも「信仰は聞くにより聞くは基督の言による」(ロマ十〇十七)とある如く、基督者はみな基督に聞て神を信するのである、で信仰に神の力、神の恩みを齎らすのである、即ち信が源に達して居るからである。

## 第七章 家庭の聖化

土臺は堅く、水源は清きを是とし、家庭は幸ひを主とす、が家庭の淨福を願ふなれば、家庭の聖化を祈らなければならぬ。采拂で空間の塵は掃ひ除けぬが、一雨沛然として來れば一天拭ふが如く清く草木も再生の美を呈す。一家も靈雨に浴せば、家庭は自ら清められ、各自心も復活の恩みに満される、殊に自己の工夫で家族の聖化を圖り、自己の考へで家族を良化せんと企つると却て角も出で不平も起り、果ては「己が

目より梁木を除け』の誇りを蒙る、故に靜に祈るが穩で有効だ、而てイエスは『求めよ……天の父は求むる者に聖靈を賜はざらんや』(路十一〇九—十三)と教へ給ふた。聖靈は基督教徒の力だ。故にイエスは聖靈を求めよ、然らば與へん、聖靈を受けよと云ひ給ふ。何よりも先づ聖靈を祈るべきだ、殊に基督教は靈の宗教である。此の天地の始めにも先づ神の靈水の表面を覆ひたりとあつて、天地は神の靈に由て成生したものであり、基督の働きも聖靈の降下に依つて開始され、基督教の活動は五旬節の聖靈の降臨に依て起つたのである。一切は神の靈に由て始らなければならぬ。殊に家庭の聖化は神の靈の導きに待なければならぬ、戰爭的基督教に左の如き話しがある。

我母は今から二十二年前に救世軍で救はれた、最初から非常に大熱心にて、毎朝自分の部屋で家内個々の名を誦み上げて其の爲に祈禱を致します……益々熱心に神様に仕へました、凡そ二ヶ月程経つと二人の姉妹が先づ悔改めて眞面目なる救世軍人となり、復た一ヶ月程経つと今度は土地の評判な大酒家で且つ賭博者なる父上が改

心されました、夫れはごうも父上の酒の癖の悪い事と云ふたら大變な者で、酔つて外からお歸りに成つた時などは醒る迄は何時何事が始まるか知れぬ故、私の如きは唯もう頭から足の先きまでブルブル震へて隈の方に小さいさくなつて居た者であります。然るに不思議なる哉、此父上が一夜救世軍の集會で救ひを求めてからと云ふものは萬事以前とは打て變り家の内には最早や殺風景な騒ぎがなくなつたのみならず、其晩から家族の祈禱會が始まる様な次第、此祈禱會は二十年後の今日迄も繼續して居ります。其最初の集會で感動して先づ悔改めたるは當時十四歳の少年であつた、斯く申す私のテイロルである、引續いて他の兄弟姉妹も段々と救ひを求め間もなく一家十一名が悉く救世軍人となりました。

とあつて、神に祈るより手料理が早いやうであり賢くもあるやうであるが、詰り靈化を靜に祈るが最善の法である。

一國の政治には元老があり、顧問があつて相談し且つ伺ふて天下を料理するが、家

の政りごとも先づ神に伺ひ神と相談して行へば間違ひはない。グラッドストーンは毎夜家族の祈禱會を開いて、祈つた後で相談會をなし、即ち家族會議で翌日一切の仕事を定め、自ら誰にも仕事を命じた事はなく、祈つて一家の會議の結果で家族各自が働いたのであつた、だからグラッドストンの家庭は皆神政であつて、神に依つて各々働いて居たやうなものであつた、故にグ氏に使用された者は家婢家僕に至るまで身を過つた人はなかつたと云ふ。神の靈に依てなつた世界に生存する者は、神の靈に依つて動けば過ちはない。

故に家拜即ち家族の禮拜が大切である。家拜には別に定則と云ふものもないから、各自輪番に司會を務めて其會を導いて居るもあり、主人か主婦が司會で家拜を營んで居る家庭もある、代議士河上丈太郎氏は左のやうに云つて居られる。

私の父がイエスの弟子としての生涯を創めたのは父の不惑の年の私がまだ四歳の幼兒であつた。其れが今年七十七歳になる迄父は墓地くらに信仰の道を辿つて來て居

る、父は教會の禮拜には缺く事があつても自分の家拜を忘れる事が出來ぬ人である。家拜は洵に素朴なるもので唯聖書を一章讀み祈りをするに過ぎない。然し聖書は創世記より初め默示録まで全篇もう幾度くり返されたか知れない、私はこんな空氣の裡に育つて來たのである。父は略々四十年に近い信仰生活で不斷に私に教示するものは人間は神の召しに従へど云ふ事である。神の召しがなければ一切動くなど云ふのである、私は父とは教養を異にし生活を異にし時代を異にして居る、従て私の頭腦にも心臓にも父と異つた感情もあり思想もあり人生の態度も信仰も異なる、が然し私は自分の生涯の行路について即ち職業を撰ぶに當り又結婚するに際し私の生活の根底を支配したものは、父の教へてくれた祈つて召しを受けると云ふ單純の信仰であつた、昨年總選舉に際し私の同志諸君の切なる立候補の勧誘を受け、父に其賛否を求めた時も父は依然として神の召しなれば立てと云ふてくれた。

と云ふて居られる、家拜に只聖書一章を奉讀して祈禱を捧ぐるだけでも、四十年も續

て居れば自己も家も潔められる。

家拜と共に大切なるは聖日の嚴守である。川口省三と云ふ人が英國に電信布設船を受け取りに往き暫く老夫婦と小さい娘との三人の家に下宿して居たが、其老夫婦二人が親切に父母にも優りて世話してくれるので其愛には痛く感じたが。日曜日に教會に誘はれるのには困つた。平素の親切に對し否み難く、種々口實を設けてそれを缺くと機嫌が悪るので閉口したとの話しであつたが、其人は未信者で聖日の意義を知らぬからさう話されたのであるが、聖日は左の如き意義のものである。

安息日を忘すして是を聖日とせよ、六日の間働きて凡て汝の工をなすべし、第七日は汝の神エホバの休みなれば汝凡ての工をなすなかれ、ならびに汝らの子女、僕、婢、畜、及び門内にある旅人も然せよ、そはエホバ六日の間、天と地と海とその中にある一切の物を造りて第七日に休み給ひたればなり、此故にエホバ安息日を祝ひて是れを聖日とせり。

(出二十〇八、十一)

とあつて、家に泊つて居る他國の人まで此日を守らせよとの誠律であるから、其老人夫婦は下宿して居る人まで忠實に教會へ導いたのである。英人はよく聖日を嚴守した鐵血宰相、ビスマークが、倫敦の港に上陸した時、海岸にも人が居らず、市街にも人が見えぬ、考へ來たれば其日は日曜日である。流石のビスマークも直ぐ船へ引き歸したと云ふ話もあつた、英國は日曜を聖日として嚴格に守つた國であつた、而て其の頃の英國は立派なものであつた。

聖日の嚴守は祝福の本である、『我を愛し我が誠律を守る者には千代に至るまで恩みを與ふ』とは神の約束である、信州大町の南部小三郎と云ふ信者は二十七年の間聖日を固く守つて居られる。而も南部氏が東京から大町に往つたのは、明治二十三年一月の事で、年もまだ二十歳で無經驗な青年時代であつた、加ふるに自分の仕事は、信州北端の大町には相應はぬ洋服の職であつて、其の時代洋服を着る人は極めて少く、従つて依頼者もなく、屢々自分は何せ洋服職など撰んだのか、若し青物屋であれば擔

ついで賣りに行かれる、按摩なれば笛を吹いて歩けるにと、夜間其の笛の音に盲人の仕事までも羨望した時もあった、其經營慘憺、日も猶ほ足らざる時期、基督教を聞いて、明三十五年一月の第一日曜日から聖日として其の日を斷然休む日とし聖守し始めた。而て其の年七月二十六日にバプテスマを受けて信往となり。以來一家全く聖日には休業して聖く神に仕へて居られる、而も單に聖日嚴守のみでなく聖言實行家で又禁酒禁煙の熱心なる主張家である。禁酒演説には聘されて諸方で出演されたが、教會が無牧となつてから、日曜日には朝夕二回牧師代理に説教を務め、毎金曜日には祈禱會の司會其他牧師に代つて神に奉仕すること十餘年、でも祝されて事業は益々榮へる、而も日曜日には自分の仕事については顧客とも話さぬ、假令ひ遠方より汽車で依頼に來た人にも今日其の話しは致さぬと斷つて取合はぬ、が店は衰へぬのみか増々、得意は殖へ店は忙しい、従つて信用は大町にのみでなく近郷近郡に迄も厚く且つ重んぜられて居る。

而て氏が如上熱心な奉仕をされるものから、家族は凡て家に居る人々迄も氏と共に神の爲に働き、日曜日には家族擧つて教の爲に盡し、二人の令息と一人の義弟も日曜學校の生徒を教へて居られる、聖日以外にも、父と共に業を營んで居られる二人の令息が教會用の一切の事務を執つて居られる、斯る奉仕の家庭であるから、子たちは勿論、家に居られる者でも悪化で困ると云ふ心配は少もなく、一家明月の如く圓滿である、一家斗りでなく、氏が十餘年牧師に代つて務められた結果、約八十名も悔改めて信者となり多くの人が喜んで居られる。南部氏も感謝して左のやうな書面を送くられた。

前文省略、病弱なる小生も主の御能力に支へられ今日迄御用を務めさせて頂いて居り候御蔭様を以て伴共が商賣の方に精を出して呉れます故小生は裁斷と書信と帳簿位にて其他は讀書の時間を與へられ感謝致し居り候。而て今日小生と同年輩の人々が未だ相變らず金錢問題のみに生活し苦んで居る様を見ます時に、二十歳代の時に

羨まじきとなりし人々が今では氣の毒の人に相成り居り候。先方が變化せしにあらず、當方が新生し、目も耳も新生したからであります、唯感謝の涙のみで御座います……兎に角主の特別なる御恩寵に依り、小生が入信の當時夢の如く晝がきし事が實現し家族全體一致して小なる御奉仕させて頂いて居ります事は感謝で御座います、小生より有力なる篤信なる多くの方々も、教會堂があり牧師あり凡て揃ふて居る爲めに、活動する舞臺なき方々の多數の中に、小生の如き無學無能の者が出過ぎて御用を務めさせて頂き。御用を務むる事に依り主の御苦しみを味ひ、親心を與へられ、如何なる人にも與ふるの幸福を體驗させて頂き居り候事、唯只感泣の外無之候、唯今は可成靜養仕り、一日も餘分に主の爲に働かせて頂き度く願ひ居り候。と、是を見ても聖日嚴守の生活が如何に人生に淨福を齎らすかと云ふ事が明である。南部氏と共に居られた同夫人の令弟たちも、日曜日聖守の淨福を味得して、別れて諏訪の田舎に開業された令弟も聖日固守であるが、近く同じ大町に開店せんとして居ら

れる義弟の沼田氏も聖日嚴守の堅き決心である。カールが眞理は自己の齒で嚙で味はねば分らぬと云ふたが、神の誠めも自ら守つて見ないと其の妙味は分らぬ、此眞味を解した者は、獨り南部氏のみでなく、誰れでも感謝の涙に咽せばざるを得ぬ。

## 第八章 家庭の不遇

世に常世の春のない如く、家庭も楽しい春のみでなく、嚴寒の襲ふこともある、が雨の後に晴が來たり、夜を経て旭は輝く、それで家の不遇にも失望してはならぬ、人生失望は禁物だ。近來失望の結果、自殺が多い、が、自殺は大罪だ、人を殺すは殺人罪だ、自己も人である、故に自分を自分で殺すのも殺人犯だ。信者は自殺はせぬ、が、危険なるは失望の際である。悪魔は始めより人を殺す者で、失望の期に死の使は誘ふ、で堅く信仰に立たねばならぬ、殊に神は死者の神でない、生命の主である活ける者の父である、愛なる神が人の悶死を好み給ふ理由がない、順次に夏を経て秋の稔

りがあり雪霜の冬を忍んだ、留め息が春の花となるのである、不遇も忍べば花も果も齋らす。而て愛なる神の世に悩みがあるのも無意味ではなからう、世の悩みのない人が幸で、悩みのある人のみが不幸とは限らない、基督は悲しみの人と云はれた、ダンテは烈しい政争の犠牲となり、追はれて二十年異郷にあつて終にラベンナで客死した人であつた、其の爲め神曲の名著が生れた。パンヤンは永く獄裡に苦を嘗めた人であつた、爲に天路歷程の如き大著がなつた、ロヨラは戦争で足を失ふた。其の爲に外なる人は不具であつても、内なる人は完成され、パウロ、オーガスチンと共に數へられるやうな大人格の人となられた、パウロも、河の難、海の難、盜賊の難と、人生のあらゆる難に遭遇した人であつた、が又人生最大の喜びを有して居た人であつた、「患難をも喜ぶ、我は基督の爲に微弱、恥辱、艱難、迫害、苦難に逢ふことを喜ぶ」(ロマ五〇三、哥后十一〇十)と云ふて居る、是が信仰生涯の價値である『憂きことの尙ほ此上につもれかし限りある身に力ためさん』で、艱難の下敷きとならず、其を踏み臺

にして恩みの高峰に登る爲、不遇に泣かず、困苦をも歓迎する信がなければならぬ。人生不遇に泣く人も多くあるが、其中最も氣の毒なるは親を亡ふた子である。でも人も憐れみ、自らも悲觀して、悶へる者もある、が絶望してはならぬ、米國の大統領ハーバート・フーヴァーは六歳にして父を亡ひ九歳にして慈母を亡ふた全くの孤兒であつた、マホメットは更に不幸と云へば不幸、生るゝや父は逝き、二歳にして生母には死別れて父母を少しも知らざる孤兒である。釋迦も早く母を亡ふた人であつた、十九世紀の大説教家であつたムーデーも、早く父が逝きて母の手にのみ育られた人であつた。哲學者のオイケンも父なくして母のみに育てられた人である。親なくとも氣を腐らせてはならぬ、天は自ら助ける者を助ける、努力奮闘日々十字架を負ふて進むべきである。

殊に基督は『幸福なる哉悲む者、幸福なる哉今泣く者』と云ひ給ふた、高い恩みは深い悲みの中に味ふべき者である、伏屋の曙や御翼の蔭の著者、座古愛子姉は幼く

して父母を亡ひ全くの孤兒であつたが、漸く獨り歩み出来る娘の時には全然健康まで失ふて、起つ與はざる病床の人となり、頑固な癩麻質斯で、坐するも不可能な仰臥の人となつた、兩親もなく親戚もなく健康もない全治の望みも絶した悲みの谷底へおち込んだ、が此悲みの底に於て光明を認められた、悲みが深かつたから救ひの御手に早くすがることが出来た。當時座古姉を病床に訪ふた時に、基督の救ひを稱へて此の病床此の儘が天國だと喜んで居られた。其時『病みふして歩めざる身の嬉しさよ路ふみ迷ふ憂へあらねば』と云ふ歌を書いて與へられた。眞に喜びに満たされて居られた、前とは全然一變された、其れも病氣が全快したのでも、床を離れ得られたのでもない依然として仰臥の儘であれど、内に救ひの光明を得たので、悲みの底より心は喜びの天に引き上げられたのである、其れも糠悦びではない、約三十年自ら感謝に生かされて居るのみならず、如上著書の外にも種々の著述と病床にて通信傳道で、多くの人も恩みを分ち、人を主にも導きて、自分も今尙ほ希望と歡喜に輝く生活を續けて居ら

れる、聖言に違ひなし、悲む者は幸ひだ、イエスの救ひは、ア、我れ惱める者なる哉と云ふ涙の中に味ふべきものである。

更に涙の人ヨブをあぐれば、彼は自己の生までも詛ふて左の如く呻吟して居る。

何とて我れは胎より死で出でざりしや。

何とて胎より出でし時に氣息たえざりしや。

如何なれば膝ありて我れを接けしや。

如何なれば乳房ありて我を養ひしや。

(伯四〇十一十二)

とア、彼れは母の乳房までも詛ふた、其切なるわけは大の資産は悉く奪はれ、又火事で焼失し、大風で家が倒れて其下敷きとなつて十人の子女は全滅して、一朝にして文字通りの無一物となつたのみならず、全身腫物で『我が氣息は我が妻に厭はれ我が臭氣は我が同胎の子等に嫌はる』(伯十九〇十七)と云ふ悲惨な醜い姿と化した、其上彼れの友らは彼れの正義を疑ひ彼の信仰を詰じつた、故に一時は流産の子を羨望もした、



が彼は堅く復活の信仰に立ち、よし友は疑へば飽までも疑へ、ただ「望むらくは我言書に記されんことを、望くは鐵の筆と鉛とをもて永く磐に鐫つけ置かんことを。我知る我を贖ふ者は活く、後の日彼れ必ず地の上に立たん、我が此皮此身の朽ちはてん後ち我れ肉を離れて神を見ん」(伯十九〇二十三下六)と、神の前に於て證すべしと云ふて居る、自己の辯解や釋明は反つて反感を煽るのみだ。で彼れは忍んで神の證明に一任した、が其の信仰は神に祝された、産も凡て倍にして與へられた子供も十人賜つた、十字架の下に忍耐の歩みを續けるものは幸ひだ、片岡謙吉氏は病床にも左の讚美を喜ばれたさうである。

- (二二) くるしめるときに 目をさまして  
 かみのしもべなる ヨブを見れば  
 あくまにうたれて なやみぬれど  
 なみだのうちにも 主をあがめぬ

(三二) わざはひのときも

- よろこびあり  
 父はいつくしむ 子をむちうち  
 火をもてきたふる ことをしれば  
 身をやくばかりの 苦をもしのばん

神の前に黙だし忍ぶ者は幸ひだ「縦ひ人倒るゝ事ありとも全く打ち伏せらるも事なしエホバ彼が手を扶け支へ給へばなり」(詩三十七〇二十四)とはダビデの體驗であり凡ての信者の體驗である、一敗地に塗れても、人から押し伏せられても、神が助け起し給ふ、だから人を倒す者は倒ふれても、人に倒ふされる人は倒れぬ、見えざる神の手の支へがある、爲に凡てが恩みの感謝と化する。

殊に大業に従事する時に一難越ゆれば、又一難と千難萬苦、海の波の如く起る、伊太利の愛國者、ガリバルデイの如きは、二十歳より船員として風波の難と戦ひ、二十

五歳より統一の大業に當り伊國統一の大業を達成する迄約四十年は一難又一難で、時には死に瀕することも屢々であつた。明治維新の大業も順境の幸運兒が齎らした賜でない、妻臥病床、兒呼飢、挺身欲直拂洋夷、今朝死別與生別、唯有后天后土知、と暗に吟じて家を出でた梅田雲濱もあれば、『麻繩にかゝる身よりも子を思ふ親の心を解くよしもがな』と獄裡で忠と孝との爲に泣いた渡邊華山の如きも居り「子を思ふ心に優る親心けふの音づれ何と聞くらん」と、暗涙を吞んで死刑に處せられた、吉田松蔭のやうな人もある、尙ほ平野次郎や僧月照其他多くの患難と戦ふた者があつて、今日の日本が存するのである、一國の統一にも發展にも艱苦との戦が入る、不遇を好道場として身心を鍛へなければならぬ。

戦ひなくしては勝利はない、エドワード・ゼンナーが種痘の發明家と世家に稱揚されるのは、多くの戦ひがあつたからである、今日でこそ種痘は歓迎されるが、非常な反對があつた、甚だしきは牛の種痘など種へると人に牛の角が出てるとまで、愚弄す

る者もあつた、禁酒會の女王と稱せられる、ウイラードでも烈しい反對があつた。而も家庭にまで反對があつた、善き事でも新規の事には反對もあり困難もある、ルーテルの如きは、反對の非難攻撃甚だしく、一日流石のルーテルも茫然として書齋に瞑想して居た。所へ未來の夫人となる女子が喪服を着て這入つて來た、でルーテルは驚いて、御身は何で喪服を着たのか、と云ふや、でもあなたの神様が死んだではありませんか葬式です、と婦人に云はれて、釋然として覺り、神は永遠に活く。良しウォームスの屋根の瓦が悉く悪魔となつて我を迎へるとも我往かんと、決然起つてウォームスの宗教會議に臨んだ。宗教改革の背後には斯る折りもあり斯る婦人もあつたことを忘れてはならぬ。

事業には孰れも難關がある、だから其難關を躍り越へる膽と體とがなければならぬ、如何に精神があつても身體が伴はないでは大業の達成は難い。常に身體を鍛へなければならぬ、體を鍛へるには逆境に對して戦ふが最上の法である、不遇は身心練

磨の道場だ、自然に訓練が出来、熱火を通ふして純金が現はれ、逆境を経て大人格も生まれる、不遇な家庭は好個の人格修養所である。

尤も有産階級の人でも無産者と同様な訓練も可能であらう、資産家なりとも労働もなし得られやう、だが赤貧者の苦しみは味ひ得られない、強壯者でも病人の真似は出来るが、病氣の苦痛は理解し得られぬ、病苦は自ら痛く病み惱んで味得出来るのである。無産者への同情は無産者となつて可能なのである。だから神は撰民として擧げ給ふたイスラエル人を、エジプトに奴隷としてドン底生活を學ばしめ給ふた、ヨセフは埃及の首相となる前に、冤罪で奴隷の生活も獄屋の生活も永く學んだ。人はみな同情を要す、而て博愛は人格の生命である。が、博く人を愛するには、弘く人情を知らねばならぬ、で多くの人間苦を味得する事が必要である。

殊に人は何事も獨りでは出来ぬ。人の力を要す。人を使ふにも、人に使はれるにも、多く人生苦を體驗した人に如くはない、『詩は唐詩歌は古今に人は武士樂したよりは

苦勞した人』と云ふ歌の通り。使ふにも苦勞した人の方が使ひよし、使はれるにも、苦勞した主人の方が體驗のない人よりもよい、ムーデーは幼き時に父を亡ふて母の手一つで育てられたのであるから苦勞して育つた人である、で彼れは靴屋に丁稚にやられたが、彼れは家でもよく働いて居たのであるから店員となつても御客様然とはして居らず、能く働き店に客が居なくなると、外に出でて、往來の人に呼びかけて品の良否など説明しつゝ客を伴ひ來りて商賣したこの事である。去る四月十日のことであつた、近江より汽車に乗つた、列車は御所拜觀の人で溢るゝ斗り、併し京都で列車はからとすいた、だが代つて又満員で、前に腰をかけた人は新聞を不亂に見て居られたが『新聞はよいものだが店に居ては新聞も見れぬ』と云ふと友は『其れだけ忙しければ結構ではないか』と云はれて、『店で新聞など見て居る商法が暇のやうにも見え又自分が見れば店員も見るから』と云ふ話を聞いて、其處で商人の心理を學んだが、其時端なくムーデーの二哩主義を思ひ出だして、内が暇なれば外に出て客を連れてくれ

ば店も賑ふ主人も喜ぶにと思ふた。『汝に一里往くことを強ひなば共に二里ゆけ』(太五〇四十一)と聖言みことばの通りに、務め以上務める實行家は、何處にも必要だ、知人の一人に鐵道の技手があつた、永く勤めて居られたので、淘汰の度びに今度は私しの番と云ふて居られたが、何時も残されて孜々汲々働いて居られた、而も人からは務めの良否を撰ばず明暗に係はらず働らく人で、此處になくはならぬ人物と目されて居られた、が其れが信徒の眞である、『僕たる者よ基督に従ふ如く畏れおそ戦おのき眞心をもて肉につける、主人に従へ。人を喜ばする者の如く只目の前の事のみを勤めつとず主に事ふる如く快く仕へよ』(弗六〇五六)とは神の聖言であつて、神を畏れる人々は、人に云はれる迄もなく、神の前になすべき務めは、自ら進んで務め、而て神をも人をも喜ばすべきである。獨り使はるゝ者のみでなく、又人を使ふ所の人でも、神を敬ふ人であれば如何なる人をも神の子として愛するから、使はるゝ者の幸ひである、相愛は信者の務めである。

神は信徒に相愛の眞意を學ばしむる爲に、人を種々の境遇に於て各種の人情を學ばしめ給ふ。故にヨブを悲惨の境遇おとしに陥れて、其地位に居る人々の心を學ばせ給ふた、要するに、世は何處もみな修養所だ、工場も學校も、商店も病院も、家庭も農場も、神に教養され試験される、校堂に過ぎぬ、だから人は何時、如何なる所に居りても、今神の前に教へを受けて居るのであると云ふことを念頭に忘れてはならぬ、アサリヤやハナニヤが火に投げ入れられた時にも、神は火中に共に居給ふた、不遇の際にも神は共に居給ふ、子の危篤ききくの時には親は側を離れぬ、天父は尙ほさうである、要は只如何なる難關をも躍り越ゆる勇である、順境にある有産階級の人々もスバルタ的の訓練も必要だと思ふ、身心共に鍛へて無事の日でも有事の覺悟で當るべきである。

## 第九章 家人の結婚

人には三つの大禮がある、即ち誕生、結婚、葬儀の三大禮である。が誕生の祝ひは

無意識の中に行はれ、葬儀は死後、人が執り行ふのである。だが結婚は自ら撰び自ら定め自らが主となつて舉行さるゝ大禮である。而て一生の運命も是に由て定まるのである。本人は素より家族も共に注意しなければならぬ、曾て讀賣新聞に左のやうな記事が載つて居た事がある。

……記者様、私の煩悶は良人の品行問題で、ございます、もともと私は今二十二歳で厳格な家庭に多くの兄弟と楽しく暮りました者で、十九の春、只今の處に嫁しました……而て結婚して初めて、見せつけられた世の中は、何んと云ふ穢れた暗黒なものでせう。私は平素多くの男子は品行方正で如何はしい場所へ足を踏ふ入れるのは或一部分の男子の事と思ふて居ました、が結婚してから半年たつた、ずい、良人の性行がさうした或種の男子其儘であることに氣がついて、狂ふ斗り煩悶致しました云々。

と世を悲觀した事が書いてあつた、勿論之は久しき前の話しで今日は世相も餘程變つて居るから甚しいこともあるまいが、尙ほ今日でも撰擇はしなければならぬ、若し過まてば自分のみでなく生れる子にまで不幸を及ぼすから、大いに注意しなければならぬ。

殊に人は幸福を望むなれば、幸福な家庭を造らねばならぬ。而て幸福の家庭を作るには、結婚に注意しなければならぬ、良い家畜を作るにも良き種を撰び、立派な金魚を造るにも良と良とを要すとは優生學の示す所である。若し撰を誤つて劣悪な家庭でも作つたならば自分の不幸のみでなく劣性な子を殘すのは、進化の法にも反し社會發達をも妨ぐる罪過である。だから優良を撰ばねばならぬ、ワイト・パツハと云ふ人は實業家であつたが非常に音楽好きで少しの暇にも音楽を以て何よりの楽しみとして居た。其性向は自然子に傳はつて男子二人が音楽家となつた。其れから約二世紀の間に多くの音楽家を代々出だして、其音楽家として記録を遺した者のみでも七十五名もある、其中優生學者のガルトンが擧げた著名の人のみでも二十九名の音楽家がある、斯

くバッハの家から、ごうして斯る多く音楽家を出だしたかと云へば、代々絶へず姻戚関係を音楽家のみを撰んだからである。家に迎へる者のみでなく外に出す女子でも音楽家と縁組みする様になした、其れでバッハ系統から多くの音楽家が出たのである。だから結婚には姻戚関係をよく撰ばねばならぬのである。其の大切であることを頗る明らかに優生學が立證する。

其の優生學なるものは、英國のフランシス・ガルトンと云ふ人が唱へ始めたのであつて、其人は紀元一千八百二十二年に生れ、一千九百十一年に八十九の高齡で歿せられたのであるから、極く新しい學問であるが。聖書は四千年も以前から其れが教へてあつて、猶太人は他邦の人と結婚を禁じてあつた。其れは猶太人は神に仕へる特別の民として撰ばれたのであるから、特に優良の民族にならねばならぬ。而て其清く撰拔された中より、救世主基督を出だすと云ふことが神の御計畫である。信仰の父アブラハムは、カナンの地よりイサクの妻を迎へなかつた、カナンは詛はれたハム族の住ん

で居た地であつた、だから自分の住んで居る、便宜なカナンの地より子のイサクに嫁を迎へず、深く考へ切に祈つて、遠い不便なメソポタミヤから、ベトエルの娘リベカをイサクに迎へた、此時イサクは四十歳であつたが、彼れは三年前に母を亡ふて悲しみに沈んで居た、でアブラハムは切に祈つて其嫁を娶つたので、痛くイサクは歡んでリベカを母の天幕に迎へて母を亡ふてより始めての慰めを得たと云ふ。父アブラハムの深き愛、大事を託された僕の忠節、迎へられるリベカの包む喜び、迎へたイサクの心情、細やかに創世記二十四章に畫がかれて居るが、内村氏が小説以上の小説と云はれた如く深遠な記事である、聖言に『家と寶財とは先祖より承嗣ぐもの賢き妻はエホバより賜ふものなり』(箴十九〇十四)とある如く良妻は全く天の賜で。リベカは賢くもあり熱信でもあつた、神は將來の事をリベカに告げ給ふた。即ちお前は二人の子を生むが弟は兄よりも強く大きくなつて兄は弟に従はんと告げ給ふた。リベカは弟のヤコブを愛した、而て其聖語の通りヤコブはイスラエルとなり、其イスラエル民族から

モーゼも起り基督も出で、而てイスラエル民族は尙ほ今日迄存して居る。斯く結婚は重大問題である。

如上の理由より猶太人は異邦人と雜婚を禁じられて居た、良い種はよく耕された、良い地に良い氣候の時期に播くべきものである、基督は御自身を一粒の麥に譬へ給ふたが、基督と云ふ天來の救ひの只一粒種を播くには、よく深く耕さなければならぬ、で「彼らと結婚すべからず、汝の女子を彼の男子に與ふべからず、彼の女子を汝の男子に娶るべからず」(申七〇三)と、他邦人との結婚は堅く禁じられてあつた。是れは基督降誕後とても同然イエスの血に依つて罪を清められた信者は、矢張り信者を撰ばねばならぬ。其故聖書には「不信者と軛を同じふすな釣合はぬなり、義と不義と何の干與かあらん、光りと暗きと何の交りかあらん。基督とベリアルと何の調和かあらん信者と不信者と何の関係かあらん」(哥后六〇十四、五)と不信徒との結婚を誠めて居る、其れは人をして優良な者とならしめんとし給ふ愛の誠めである。

故に基督の血に依て全く潔められた者が神に祈つてその聖旨に従つて結婚するなれば其の家庭は祝される、米國にエルサベス・タットルと云ふ婦人があつた、美しく體格もよい、賢い人格も立派な、英國の皇統の遠縁に當る婦人であつて、。一千六百六十七年十一月十九日に、米國のハルト・フォールドの法律家、リチャード・エドワーズと云ふ人と結婚して一男四女を擧げた、然るにエドワーズは其良夫人タットルを離縁して更にメリー・タルコットと云ふ婦人を娶つた、而て又五男一女を擧げた、が此後妻は平凡の婦人であつて、此婦人の子供には勝れた者はなかつた、だが前の婦人タットルの子は學才もあり人格も立派な人であつた、其人の子が、有名なチヨナサン・エドワーズと云ふ學者である、であるからチヨナサン・エドワーズは、タットルの孫である。其孫である、エドワーズは教育家であつたが確實な信仰に高潔な人格を具へた人で、プリンストン大學の總長であつた、が又有名な説教者でもあつた。此偉大の人格から生れ出した子孫は一千九百年までに、千三百九十四人と云ふ大數であるが

其内、

大學卒業生	二百九十五名
大學總長	十三名
大學教授	六十五名
醫師	六十一名
宣教師牧師神學者	百名
陸海軍將校	七十五名
文學者	六十名
法律家	百名
判檢事	三十名
官公吏	九十名

此の九十名の中より副大統領が三名もあり、大使、公使、知事、市長、上院の議員

と云ふやうに立派な人揃ひであつた。尙ほタットルの四人の娘たちの家庭からも相當立派な人物が出た、人には間違ひがあつても、神の設計には狂ひはない。だから神の引き給ふた圖面の通りに組立つれば家庭も社會も立派に出來上る、神の活ける言には違ひない、優生學も事實も明らかに立證する。

神に祈つてなした信徒と信徒との結婚であれば過ちはない。だから此章の始めに於て述べた十九の春、結婚したと云ふ婦人のやうに、半年もたたぬ間に狂へる斗り驚いて後悔するやうな事はない。自助論の著者スマイルスの書いて居る彼れの經驗を左に舉げて見やう。

ソレに其頃、自分は妻を娶る約束をしたのである、然れば向後は一口の代りに、二口を養ふに足る丈けの稼ぎをしなければならぬのであつた。以前は金錢のことでや之を獲る事などツイぞ念頭に懸けず、朝夕の用に充てる丈けの費用と其外に些少な貯蓄がありさへすれば、ソレで事足れりなどと思ふて居たが、サテ是れからは『奔



走乎衣食』しなければならぬ。また將來をも慮らなければならなかつた、誰れにせよ結婚するならば第一、相當な資力を有つが肝腎である。而も其資力が段々と殖える見込みのあるものでなければイケない。

されば自分は再び開業醫となる方が寧ろ宜しからうと考へた、之を許婚に告げた後ち、遂に其業務に戻ることにした「リーズ」市外「ホルベック」と云ふ處へ、一軒の家を借りて看板を下げた、月日の經つ中に色々の用務に立觸るやうになつた。五、六の掖濟會に屬する人々を見舞つて、治療に従事したが、其れで勞働者間には名が知られるやうになつた。又日曜日には「ニュー・ウォルトレー」の「ジョン」學校で青年たちを教へ、時々演説をも聽せて居た。件の新聞とは未だ全く縁を絶たず論説を書いて遣つて居たが、ソレも據り所なかつた間丈けで其後、ソウしなくても宜い様になつてからは已めた。其他在「リーズ」の或る書籍出版商の依頼を受けて色々の案内書や小さな書冊なども書いた、其中には「アメリカ」案内とか「イギ

リス』殖民地案内と云ふものもあつたが其「イギリス」案内書の如きは、殊の外に賣れた。

其れから其出版商は「アイルランド」の歴史を書いて呉れと曰つたことがある——自分に取つては、全く新奇な柄の著作題なのであつた。然し参考資料とすべきものがあるかと思つて詮策したが不幸にも澤山は無かつた……ケレど自分は出來得る限り骨折つて遣つて見た。

四十三年其歴史を毎月一冊づゝ出版した。考へて見ると餘程急てて書いたのであるから賣れはしたものの、其實左程の價値を有つては居らなかつた……

其歴史最終の一冊を出版して了つてから四十三年の十二月に結婚の式を擧げた、今までは只一人であつた家の内も其の年のクリスマスには和氣洋々として楽しく思はれた、自分は今日に至るまで、ツイぞ結婚を悔んだ事はない、吾等夫妻は偕老同穴の生涯を過ごした者と云つて宜いと思ふ。怡々として氣色の常に麗はしき妻は依

信の心篤き夫を有つたと思つて居るのであらうし、情愛の深き一生の伴旅を得たと  
思へる夫は、妻の心も亦然う有らうと信じて居る。

と云ふて居る、結婚したのはスマイルスの三十一歳の時であつた。彼れは老齡になる  
まで、ツイぞ結婚した事を侮いたことがないと云ふて居るが、夫人もさうであらう、  
結婚は人生の基礎だ。和氣藹然あひぜんの生涯であらねばならぬ、殊に人は世の荒波を避けて  
夫婦の間に位は靜かに安らう港もなければならぬ。寒い冬には暖いストーブの室を要  
し、冷い社會には暖あた、かい家庭を要す、ラスキンのはぐ争はぐまれた家庭は、春の海のやうに  
滑なめかな波も立たぬ家庭であつた。神に依て結ばれた家庭は神の動かぬ如く世の風波に  
も動かぬ人生の安息所だ。

仇あだと見し秋の一夜の契ちぎりかは

神代の儘の星合ひの空

## 第十章 家庭と人生

人は幸福さいはいを望む、人生は幸福の探求だ。が幸福を望むならば、幸福な家庭を作らね  
ばならぬ。幸福な家庭を造るには、健實な人生觀がなければならぬ。なせかなれば、  
其人の人生觀に依て家庭の主義が變るからだ、一寸前きは暗みだ何時死ぬか分らぬ、  
出来る時が花だ、飲めよ食へ、歌へよ笑へと云ふやうな刹那主義の人と「岸迄きしまでは蜚あまも  
衰あきる時雨しぐれかな」で死の岸までも主義信仰を守る人としては、家庭の立て方が違ふ。家  
庭をして樂しきエデンとするのも、血と涙の谷とするのも其人の人生觀の如何に因る。  
而て人は生れて世に出た以上は、生きて往かなければならぬ。生きて往くにも同じ  
活きて往くのならば、善く生き幸ひに生なければならぬ。人は萬物進化の絶頂ぜつちやうだ、  
進化の頂上に現はれた生命を有つものだから、動物とは優つた生き方でなければなら  
ぬ。鳶とびの如く人のものを漑さらひ合ひ、犬の如く一片ひときれの肉をも奪うばひ合ひ咬かみ合ふ生き方かたで  
は、人としての良い生き方かたではない。人はみな生いきんとして急あせる、嬰兒わいじの呱こ々の聲は、  
生んとする欲望であるので、飢ゆれば乳を叫び寒ければ暖を呼ぶ、みな生命の切なる

欲求である。だが此欲求は人生永久に止まぬ、人生五十年と云ふが、七十になつても百になつても生んとする急りは衰へぬ、生は何時まで生だ。生には無限に伸びんとする欲求があるのみならず、人の生命には深く入らんとする懼れもある。子供は一種の哲學者だ、『是は何』、『アレは何』、『其れからどうして』と問題を連發して父兄や長者に質問の矢を放つ。其れは深く博く未知の世界を知らんとする、幼な心の懼れである。只無意味に生んとするのではない、向上もし發展もせんと望む。又誰れも悪くなるのを望む者はない、善く生き、より善くなり度いとは一般人心の願望である。

其の善く生きると云ふ見地にも、色々な立場があつて、富有的な生活を是とする人もあれば。智者たるを善とする者もあり、無慾を可とする人もある。又此世を苦の娑婆と見て悲觀する人もあり、世を樂園の如く考へて享樂的に生きる人もある。要するに人生を科學的に觀るか、哲學的に觀るか、宗教的に觀るかの三つである、科學的人生觀にも種々あるが、結局は人間進化の絶頂と見て、天上天下人間より上の者なしとす

るのである。其れに反して、尙ほ人間の上に神が存するとするのが宗教的の見地であり。而て其の間を行くのが哲學的人生觀である、殊に近來の哲學には唯物的人生觀は極めて少く、多くは唯心的精神的である。例せばオイケンの精神生活、デイルタイの生命哲學、ベルグリンの創造的進化の如くである、即ち人生は創造つて悦び、創造しつゝ進むのであるとの意である、又人生は圓滿の悦びであると云ふ人もある。圓滿な喜びだ、一人よがりではない、人を喜ばせて、人に喜んで貰つて共に悦ぶ、其れが人の善き活き方であると云ふのである。人は造つて喜ぶのであるが、惡い物を造つては人は喜ばぬ、が不良な子を作つても家人でさへも喜ばぬ、又喜べぬ、だから人は自分のことのみでなく人のことを顧みなければならぬ。自己のみ健康でも、家婢がコレラでは安心して居られない、家の事のみでなく、隣から火事が起つたなら無關心では居られぬ、其の如く自宅からベストを出だして隣家が無頓者では居らぬ、火事や傳染病のみでない。不良の徒を出だしても人までも迷惑する。だから自己の品性陶冶に

も努め子供をも善く作り、人々の善導にも力めなければならぬ。

人生眞の幸福は善隣と云ふことにある。自己と家庭、自己と社會とは相即不離の關係であつて、今日では個人を離れて社會もなく、社會を離れた個人もない。殊に今日の社會は、太古の社會の延長なのであるから、我らが有する生命も何千年も昔よりの生命の延長に過ぎぬ、だから釋迦の思想も孔子の精神も、ソクラテースの考へも、モーゼの信念も、基督の教へも我らの生命に働いて居るのであるから。關係が永く續けば續く程、廣くなれば廣くなる程我らの生命は豊富になる。特にイエスが『我が來るは羊に生命を得しめ且つ豊に得しめん爲めなり』(約十〇十)と云ひ給ふたのは、此意味を強調されたのであつて、イエスとの關係は、地に關係が擴がるのみでなく、高く天に伸びて神との關係、永遠の豊なる關係に入るのである。同じ生命でも鳥と獸とは其質が異り、同じ人でも文化人と野蠻人とは生命の質も量も違ふ、生命が違へば働きも違ふ。働きが違ふから作るものも亦違ふ、蜘蛛の巢と雀の巢とは大いに差ふ、

生命が異れば働きも異なる、働きが異なるから其作るものも違ふ。生命が豊かになり、善くなれば善くなる程、善いものが作り出される。善いものが創作されるから、其處に快もあり喜びもあり、従つて人生創造の悦びが味はれる。人生は、エヂソンが發明品を作出しては、自己をも人をも喜ばす如く、良きものを創造して自他共に喜ばす生涯でなければならぬ。

而て人の快不快も多くは創造の良否によるのである。良く出来れば快、不出来なのは不快である、特に明かなるは子の良否である、是は直接自分に係るからである、不良兒は親の限りなき苦痛、人格の立派な子供は親の快是以上のもではない。常に快感を有して居られるやうな良い子を作り善い物を造つて自他共に益し、自己にも善く家族にもよく他の人にも善い感じを與へる生活をせねばならぬ。其れでない社會は進まぬ、若し凡て人が粗惡な物と、不良の子のみ造つて居れば、進化の世界は退化に傾く、だから人が善く生きないと云ふことは、社會進歩の仇、生物進化の敵だ。人

の性は自然に快を好み善を望む、凡ての人が其性に合ふ良きものを創作すれば社會は従つて進む、即ち家庭でも良い子供を造り、學校でも良い生徒を、工場では良品を、政府は良民を作り、凡てが一つの製作場となつて良きものを生産すれば、世は幸福な一大家庭となる。

一體天地は神の工場である、太陽は光と熱と、送つて海には海産、陸には山野の産を造つて居る、爲に水は熱して大空に上り、又雨となりて下りては草木を造り、更に餘れる雨水は土砂を流して海に運び、海は受けて其れを一波一波と打ち上げて陸を造り島を築いて居る。天地は創造の爲に大活動して居る、だから人も是に従つて働かなければならぬ。殊に創造が天地自然の性であるから、其性に順ふが人の道である。其道に従つて歩めば人生は幸福に活きられる、人には生きて往くのに大切な生活的衝動が二つある、其一つは所有的衝動であつて、幼兒が母の乳を吸ひつゝ、一方の乳を有つと云ふやうに所有する衝動と、他の一つは創造的衝動とである、バートランド・ラッ

セルは、「最も善き生活は創造的衝動が最大の役目を勤め、所有的衝動が最小の役目を勤めて居る生活である」と云つて居る。溜める爲めの生活でなく、造る爲に多く働くのが最善の生活である。だから家庭は蓄産所のみでなく、人格修養、良品製作所でないければならぬ、殊に水も溜ると腐り、金も溜ると、其れに頼よる子孫を腐らせる。而して財産必ずして人物を作る資ではない、今回マクドナルド内閣に女子にして英國の國務大臣となつた、ポンドフィールド女史は、無産赤貧の家から出た人である、で子孫の爲に蓄へるよりも、多く造ると云ふ働きが肝要だ、自己も子女も人をも、より善く造るのが、進化の絶頂に生れた生命の役目である。

人は造らなければならぬ、が造るには造る模表が入る。良きものを作るには良き模範が入る、が如何なるものが最も良き模表であるか、最高善、至上善は如何なるものか、人は思ふ者であるから、人の思ひも此處にまで進むと、哲學的的人生觀には留つては居れぬ、なせなれば人は其顔の異なる如く考へも異なる。子供の思ひと大人との思ひは

異り、文明人の思想と野蠻人の思想とは違ふ。而て人は全き者でない、全き善の標準は人よりは得られない、だから完全な善の模表は人間以上の者に求めなければならぬ、故にカントの如き人でも、『最高善の世界組織がなければ、我等が如何程不死であつても徳と福との調和は望まれない、併し斯る世界を要請することは、同時に此の世界の本原としての最高善、即ち神を要請する事となる』と云ふて居るが。西田博士は善の研究に於て更に次ぎのやうに云ふて居られる。『善を學問的に説明すれば色々の説明はできるが、實地上眞の善とは唯一つあるのみである。即ち眞の自己を知ると云ふに盡きて居る、我々の眞の自己は宇宙の本體である、眞の自己を知れば、常に人類一般の善と合するばかりでなく宇宙の本體と融合し神意と冥合するのである、宗教も道德も實に此處に盡きて居る』と、即ち道德も深く考へ進むと、終に善の根元なる神に迄到達する。要するに神より出た人は復た神に歸らぬと胸の波は治まらぬ。

であるから哲學的人生觀も人生永久の安宅ではない、詰り哲學は人生健實な宗教に

至るべき安全の正路である。何故なれば宗教は哲學的考察がないと迷に落ちる、一點の雲なき青天白日的宗教に入るには哲學も亦必要である。人間が角なく牙なく蹴爪もなくして、能く動物に打ち勝ちて文化の世界を造つたのは要するに理性の力である、而も弱くして能く猛を制し、信じて迷にも走らしめざりしは、髓に理智の働きであつた。だが人は只理智のみに、永く止まつては居られぬ、人には信仰の世界がある、人は哲學的學究より進んで宗教の世界に入らなければならぬ。

勿論宗教にも學的研究がある。即ち神學は其れである、理性に用なき宗教は人間の宗教ではない。道理に適はぬ信仰は理性を有する人間の信仰でない、理性を無視した信仰は、理性が目覺めると理性の方で其信仰を無視する。而して終に理性に會ふ信仰に飛ぶ、理智が眞に目醒ると道德的にも高き全き善を要するに至る。善の根本なる神に接するやうになる、パウロも學究の人であつた、が深い信仰に入つた、オーガスチンも學究より信仰に進んだ、而て初めて安住の地を得た人である。近來有名な基督の

傳を著はされた、バビニも學究より信仰の世界に轉じた人である。人生はここに至らぬと安定は出事ぬ。人は誰れでも眞の信仰に入らなければ、人生の淨福は味はへぬ、要するに西田博士が云はるゝ通り、眞の善とは唯一つのみであるから、其善の外には善はない、更に云へば、基督の言の如く、「神獨りの外に善き者はない」、善なる神を離れて善はない只善なる神に結びついてのみ善となるのである。善なる神に結び着くから善は幸福も感ぜられるのである。だからバスカルは云ふた、「世には三種の間以外にはない、神を見出だして是に奉仕する人々、未だ神を見出ださず専心是を求めて居る人々、神を見出だしもせず又是を求めもせず生きて居る人々、第一は道理を知つて居り且つ幸福である、最後の者は愚鈍で不幸である。中間の人々は不幸ではあるが道理を知つて居る」と、更に云へば人は神に依てのみ幸福を味ふべき者で、神を求めて見出だした人は幸福で、求めつゝも神を見出ださぬ人は幸福に達せぬ人、神を求めず宗教に無頓着なるが最も不幸である。人生眞の幸福は神を本當に能く知ることである。

とである。

面て神を知ると云ふことは神を理解すると云ふことのみでない、信じて神の力、神の愛を感知することであり、神秘を體得することである、神は萬善の本だ、其の力に觸れて凡てが善化され良化されて、歡喜と感謝の湧く生涯に入るのである、でパウロは云ふ「常に喜べ絶へず祈れ凡てのこと感謝せよ」〔撒前五〇十六〕と、凡てが悦びとなり感謝となり、自然讚美の歌ともなるのである。古への詩人も左の如く歌ふて居る

感謝しつゝ其のみ門かどに入り。  
 讚稱ほめたへつゝ其の大庭おほなはに入れ。  
 感謝して其のみ名なを讚ほめたゝへよ。  
 エホバは恩み深く其の憐み限りなく。

其の眞實まことよろづ世に及ぶべければなり。

(詩百〇四、五)

と、是れが活ける信仰の體驗である、宗教には體驗の世界がある、其境地は言には云

ひ現はせぬ、只讚美である。廿二歳迄散財もし勝負ごともした不品行なフランシスも救はれて一變して、アシシの聖者と稱さるゝ人となり全く感謝の生活であつたが、左の如き太陽の歌がある。

あゝ最いと高き大能にして善き主なる神よ。

讚美と榮光とあらゆる祝福とは爾のものなり。

最と高き主よ是れ等のものは唯爾に屬し。

いかなる人も御名を呼びまつる値ひなし。

.....

ほむべきかな我が主なる神萬物の造りぬし。

わけても主は我等の兄弟なる太陽をつくり。

日と光とを我等に齎もたらさしめたまふ。

彼れ美はしく最と大いなる光彩を放つ。

主よ是れ我等に御姿みすがたを思はすもの。

ほむべきかな主や我等の姉妹なる月と星とを。

あざやかに美はしく大空おほぞらにきらめかせたまふ。

ほむべきかな主や、我等の兄弟なる風や。

大氣や雲や將た晴れたる荒たれるなべての天候により。

主はよろづのものに命いのちを支へしめたまふ。

ほむべきかな主や、我等の姉妹なる水を造りて。

我等の用をなし心謙へりくだり貴く清からしめたまふ。



ほむべか主や、我等の兄弟なる谷を造りて。  
我等暗き中にある時光りを與へ。  
彼いと明く楽しく力あり且つは強し。

ほむべきかな主や、我等の母なる大地を造りて。  
我等を支へ且つ保つ。

又は草木をそだて花を咲せ實らしめ給ふ。

ほむべきかな主や、主の愛にならひて互に恕し。  
弱きに耐へ悩みを忍ぶ多くの人を主は起し給へり。  
心やすらかに忍ぶ者は幸ひなり。  
主よ爾は彼等に冠を賜はむ。

ほむべきかな主や、我等の姉妹なる死を造りて。  
其手より何人をも逃るゝを許し給はず。  
死に値ひする罪を犯して世を去る者ぞわざわひ。  
いと潔き聖旨によりて歩むこそさちなれ。  
彼等は再び死ぬるとも何の害はるゝなし。

主をほめたたえ且つ感謝し。  
心をひくうして仕へまつれ。

とは其一つの歌なるが、其生活も全く其の歌の如き生活で、人間を神に依つて兄弟姉妹とするのみでなく、鳥獸までも眞に兄弟姉妹として愛し、日々潔き愛の生活であつ

た。而て其生涯の幸ちを感じて、人生は諸々の天が神の榮光を現はす如く、殊に萬物の長たる者は凡てのことに於て神の榮へを現はすべく左の如く人にも勸めて居る。

我が主等よ聞け吾子等吾兄弟等よ我が言葉に耳を傾けよ。我心を聞き神の子の言葉に服従せよ、汝の全心を擧げて此誠を守り完全に彼の助言に服せよ、彼れを讚めよ、そは彼は善なればなり、汝の業に依りて彼の光榮を現はせ。汝の言葉と模範とに依りて神を證明し、神のみが全能なるを凡ての人に教へん爲め、神は全世界に汝等を遣し給へり、訓練と服従とに嚴格なれ、而て正直にして固き意志をもて汝の約束せしものを守るべし。

この語であるが、要するに神の恩みに生き、其證明の爲に盡せこのことである、が是は獨り宗教家のみでなく、教育家のパウロ・ナトルブも云つて居る、「唯神に忠なれ、神以外の何人をも何事をも畏るゝ勿れ、と云ふ一の普遍的信條が効力を有すべきである、彼は人生の中には、そが自らを發見するまで、その創造者を認識し、其創造者と

自己との間の眞の交互關係を肯定するに至る迄、心に休息を與へざる、持續的要素が存在して居ることを固持するであらう、又固持するも差支へない、此處に於て最早や自然必然性は云爲されないうで、神の勝利の確實であると云ふ理由が内面から、人間の心の最も内面から、其れが自分自身と自分自身の中に神を見出だす所の其の最も内面から、純粹に創造されるのである、而て宗教は彼に取つては我々の最も内面への歸來である、其の最も内面的なるものが吾々を無限なるものへ、寧ろ超有限なるものへ導いて行く吾々は何故に此處に努力が最終のものであるかを完全に理解する、又何故に完全なる努力は完全なる勝利であるかを完全に理解する」とは、彼の講演の一節であるが、人は神に創造された者であるから、心の中に、造り主なる神に歸らなければ止まない要素がある、心の内面には其作用があつて人生は神に歸らなければ動いて止まぬ。其内面の作用に導かれて無限の神に歸れば、其生涯は勝利であり感謝になるのである。

而て其の人生勝利の生涯、感謝の生涯は怠慢な生活ではない。凡ての業に於ても神の榮へを現はし、ナトルプの云ふ如く、完全の努力であり、パウロの云ふ、「其の身をもて神の榮へを顯はすやうにせよ」(哥前六〇二十、同十〇三十一)と云ふ、人生の使命を痛感するやうになる。此の使命觀が明かになり、従つて強くなるから、自然徒食して居られなくなる。聖書に、「何故終日此處に空しく立つか」(太二十〇六)と、聖語があるが、人生此世に空しく立つて居るべき者でない。猫には猫、犬には犬の務めがあり、人にも男は男、女は女の務めがある。だが如何に男は力が強くも、子を産むことも出來ず、乳がないから子供を育てることも出來ぬ。其れは男子の職でない婦人の務めだ。が男子には外の任務がある。子孫の發展、人類の幸福増進を計らなければならぬ、でトルストイは「人類の本務は二つに分れて居る。即ち一つは、人類の幸福の増加、他は種族の存続、男は後者を履行することが出來ないやうにされて居るので、主として前者に召命されて居る、女は彼等のみが其れに適して居るので、全然其

後者に召命される、此相違は何人も忘れてはならない、又破壊してもならない、又さうすることも出來ぬ、又さうする事は罪深いことである、此相違から各の本務が生ずる、其の本務は人間によつて發明されたものでなく、物事の本性の中にあるのである。』と云つて居る、斯く人に男女の別があれば、其本務にも相違がある、男には男の、女には女の務めがあるから、子供には子供の、大人には大人の、老人には老人の務めが又なければならぬ、而て母の務めは可愛い子に乳をやるのも一つの務めである、ただ驚天動地の事業のみが人生の任務ではない。平素の小さい働きも大切な務めである、ロックフェーラーは平凡な事を非凡に行へと云ふた。平常の小さい仕事でも忠實に非凡に行ふのである、天地は神の農園だ、農園の主なる神は常に其働きを見給ふ、些細の事にも全力を傾注して務むべきである。スマイルスは云ふた、「人生の進歩は、一躍して達せられず、吾人は一步一步の進みに満足せねばならぬ」と、リンカーンは常に云つた「多くの事をなす秘訣は、一時に唯一事をなすにあり」と、彼は云ふのみでな

く其れを實行して、忠實に一時に一事を行ひつゝ、歩一步と進んで多く事務を統て治むる大統領の位置までも贏ち得た、『小事に忠なる者は大事にも忠なり』との聖語の如く、一事に忠なる故多くの事も委ねられるのである。ロックフェーラーが世界で有數な富豪となつたのも、リンカーンが今日にまで慕はるゝ大統領となつたのも、必竟平凡な務めを非凡に實行したからである。斯る生き方、是れが眞の人生である、其の務め其の位地は異つても、神も我も人も共に喜ぶ生活、其れが人間圓滿な悦びである。小事に忠なる者は幸ひである『汝は僅なる物に忠なりき我れ汝に多くの物を掌ごらせん汝の主人の歡喜に入れ』(太二十五〇三十一)とは、基督の聖言であるが、天地の主なる神の悦びに入れられた生涯、人生是れ以上の淨福はない、だから誰れでも、リンカーンの如く、圓かに喜び、滑らかに生きなければならぬ、角なき滑かな生活にして人生共に喜ぶ生涯であれば家庭は自ら恩まれる。

## 第十一章 遺族の祝福

「我を愛し我か誠めを守る者には恩恵を施して千代に至るなり」(出二十〇七)とは神の誠めであり約束である。是は人の心の内面を能く知り給ふ、神の深き恩みの約束である、人はみな子の幸福を願ふ、人のみでない、生物はみな種族存續を計る、爲に生物が減びないのである。種族の存續を計るは、生物の自然だ、であるから人は更に子の往く末を思ふ、殊に自分は困つても子は困らせたくない。自分はみじめな暮らしをしても、子供には相當な生活をさせたいとは凡て子を有つ親の願ひである。親は自分の身の往く末よりも、子の往く末を心配する、だから心の内を知り給ふ神は、子供の祝福を約し給ふた、而も我が誠めを守る者には子孫千代に至るまでの祝福を約し給ふた。

而て其れは變らない契約である。人の約束には變りがあつても、神の約束は天地と共に變らない、殊に神は我等が子供を知るよりも、より良く子孫の往く末を知り給ふ、神は我らが子の往く末を思ふよりも、より深く我らの子の往く末をも思ひ給ふ、

アブラハムを思つてアブラハムの子孫を祝し給ふたやうに、我らの子孫をも祝し給ふ、神の愛は無限だ、で無限に愛を子孫に注ぐこの約である、だが其れは條件付きの約束である、無條件無差別に、善でも悪でも、有神でも無神でも、何んでも無茶苦茶に祝すと云ふのではない、善なる神は、不善は祝し給はぬ。愛は愛を要求する、愛なる神は、我を愛し我が誠律まことりてを守る者に恩みを千代に與ふると約し給ふのである、善なる神の誠律まことりてであるから善法である、神を愛して其の善法を守る者が無限の恩みに預るのである、善悪の別べつめなく恩み給ふと云ふのではない、善なる神を離れて不倫不道德を行ふ者には其誠めがあつて、『我を惡む者に向ひては父の罪を子に報ひて三四代に及ぼし』(出二十〇五)と、あつて善惡共に應報がある、而も是れは堅い神の定である。

古來善因善果惡因惡果と云ふことは唱へられたが一般の人には明かに分つて居なかつた。而もモーゼが神の鐵筆を以て明記したのは、今より三千年以前のことである、それが多くの人に信じられなかつた。が今より六十四年前、即ち紀元一千八百六十五

年にメンデルが發表した、遺傳の原理に依て、神の約束が確實に立證されるやうになつた。而もメンデルが八年間多大の苦心と工夫とを以て研究した發明の發表も、三十五年間は誰れも顧る者も、信する人もなかつた。世紀も變つて二十世紀の初め、即ち千九百年に至り、オランダのド・ブリース、オストリヤの、フォン・チエルマツク、獨逸のコルレンスの三氏が相前後して遺傳の法則を發見して發表し、各自互に自家の發見と思ふて居たが、既にオーストリヤの舊教の信者メンデルが其より三十五年前世界に公表しておいた事であつた、が以來遺傳の研究は益々盛になり確實になり。遺傳の法則は確固動すべからざる學となつて、色々な實用に供せらるゝやうになつた。

遺傳の研究は今日は色々な方面よりされて居る。始めメンデルは、豌豆わんとうの各種の種類を以て試みたが、今日では植物の色々な種類、動物の禽獸昆虫種々實驗されて居る例へば丈の高い豌豆と低い豌豆とを交配種とすれば、其種を蒔いた豌豆は全部丈の高いものとなる、其れを第二世代と云ひ、又優性と云ふ、即ち丈の高い紫むらさきの花の豌豆

が優性だから、丈の低い白い花の劣性は其勢力に包まれて、其中に隠れて仕舞ふのである、が其雜種即ち交配種の第三世代になると、三對一の割合で、高いと低いのが現はれる、其れは低い純劣性が生じ、丈の高い方は二對一の比で、不純優性二で純優性が一と云ふ割に現はれる。即ち百の數なれば、純優性が二十五、不純優性が五十、純劣性が二十五の比で現はれるが、此二十五の純優性からは元との性に返つたのであるから、雜種は出ない。五十の不純優性のものは前と同様各種の性が現はれる、其れは始めは優性が劣性を掩ふて居るが、三代四代となると勢力が衰へて漸次に、劣性は劣性に、優性は優性に復歸するのである。例令ば鶏の有色と無色とを交配種とするなれば、第二世代は、無色即ち白は、劣性であるから、優性の有色に掩はれて、全部色のついた鶏が産れるが、第三世代即ち孫の代になると、隔世遺傳で、隠れて現はれざるはなく、掩はれて居た白いのが三對一の率で現はれる。勿論無色と云ふても目も青く脚も色があるから、純の純と云ふ寸法には往かぬが、大抵は其法則に順ふ、殊に人に

は環境と反應とに依つて多少の差があるが、遺傳が人の本性をなすのであつて、遺傳は人の基礎であり根本性である。今日は遺傳の學理は色々な方面に説かれ又用ゐられて居るから人々が多く知つて居らるるが、生命の三角形の點は必要と思ふから其儘此處に寫すことにする。

生物學の興味の中心に最初は種の起原にかゝつて居たが、其れから段々個體の起原へ移つた、十九世紀はダーウインの世紀であつた、彼の劃時代的の書物の『自然淘汰による種の起原について』は一八五九年に現れた此書物は單に生物的科學斗りではなく、多くの他の思想の領域、特に哲學と神學とに深甚の影響を及ぼした、さて廿世紀の最初の十年間に特別なる力説が、遺傳の研究の上になされた此方面の研究に於る諸研究の解釋はダーウイン時代に知られて居なかつた多くの事物の集積的發見に依つて可能にせられて居る。熟練を積める學徒たちは改良された顯微鏡を辛抱強く熱心にのぞきこんで細胞の秘密の數々を明からめた、又一方ではオーストリヤの

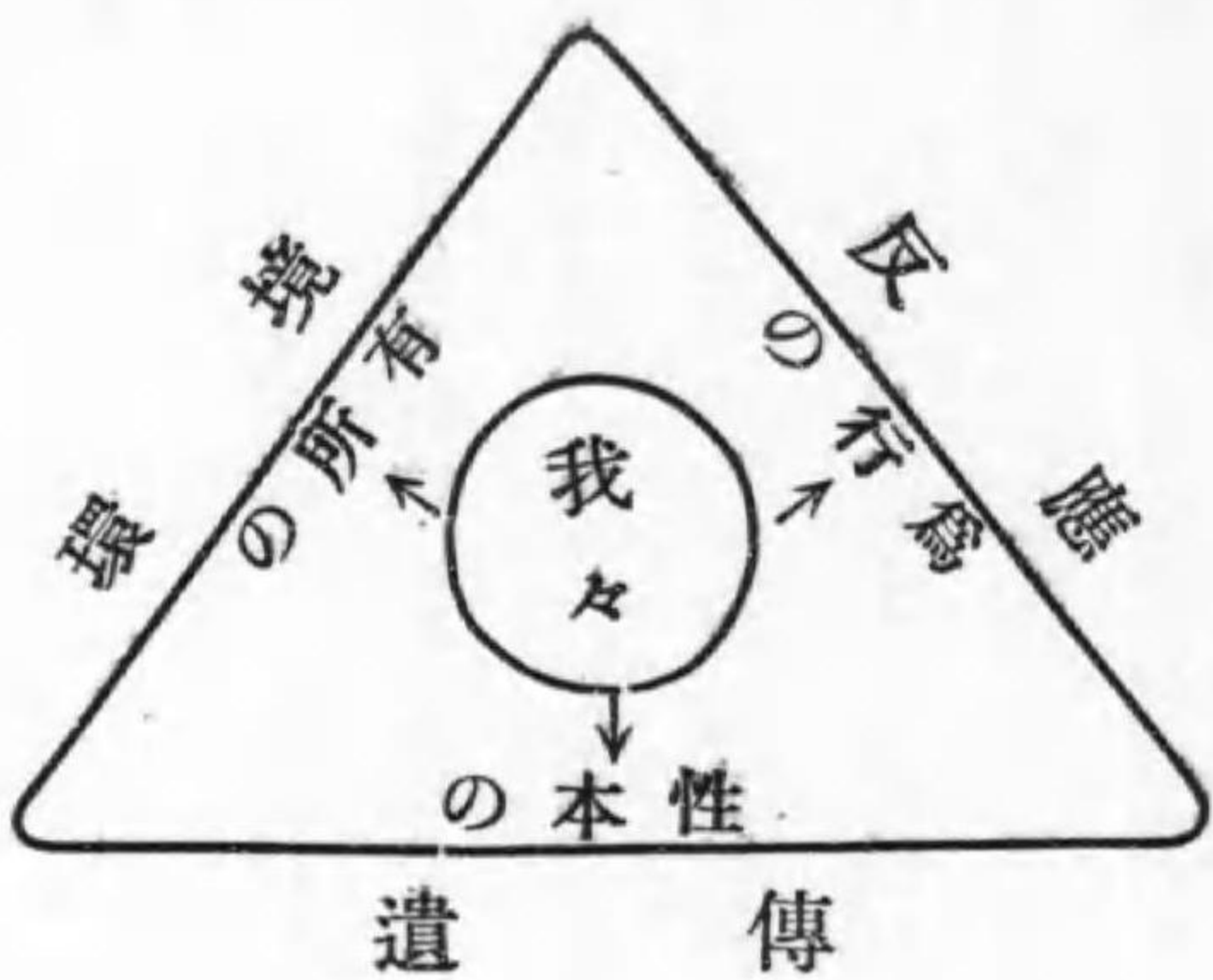
坊さんのメンデルに刺戟されて絶へず増加しつゝある研究家たちが、本世紀以前の世紀の飼育家たちには許さなかつた洞察力を以て動物と植物の飼育に、其れらの全力を注いで居る。

種の起原に關する一般的の考察から發生した個體の起原の研究は遺傳、もつと的確に言へば實績遺傳學の主題を構成して居る。

實驗遺傳學が主に關係して居るのは全體としての個體ではなくて寧ろ個體の諸形質である。

環境、反應及び遺傳と云ふ三つの要素が共に作用して個體の諸形質を決定する。其等は第一圖に示してある。個體は是等の三つの要素の中の如何なる一つを變へても變化せられるものであるから個體は其れらの相互作用の結果であると言ふことが出来る。どの一つの要素も到底省略することは出来ないけれども、實驗遺傳の學徒は最も重要な要素として遺傳を尊重して居る。遺傳は人間が生れ出でない前に定ま

つて居るものである。其れは彼の本質である其れは彼が獸たるべきか人間たるべきかを決定するものである、其れ故生命の三角形は遺傳を底邊として描かれて居る。



第一圖 生命の三角形

環境と反應は、なくてはならないものであるが此等は何れも第二義的のものである。環境と云ふのは衣食住、友達、敵、或は彼を助けることの出来る周圍の援助的狀態、彼が打克たねばならない障礙の如く個體が所有して居るものである。其れは彼が接觸する所の特殊なる世界である。其れは彼の特殊なる遺傳に與へられたる機會の尺度である。

是に反して反應は個體が其遺傳と環境とをも

つて行ふ所のことである。是は訓練的又は教育的要素と云ふことが出来る適當なる

環境を缺けば如何に善い遺傳と雖も荒地に蒔かれた善い種子の様に無に歸するものであるが、其れにも拘らず如何程、環境を善くした所で缺陷ある遺傳の償ひをした  
り。毒麥さくむぎの中から小麥を發生させることは出来ない。

環境が適當であり遺傳の賦與ふよが豊富ほうふであつてさへも。適當なる反應を缺けば、其個體は其可能性を實現させることが出来ないであらう。是と同時に如何に反應の分量を多くし、如何に教育の分量を多くした所で、獸の遺傳から人間を造り出すことは出来ない、其れ故生物學者たちは、環境と反應とは疑ひもなく、個體其れ自身に取つて非常に重要であるけれども、結局は遺傳が、もつと遙はるかに重要であると云ふことを信じて居る環境を改善し且つ善く訓練し教育すれば、既に生れて居る世代を改善ぜんすることが出来る、遺傳を改善すれば將來の有らゆる世代を改善する事が出来る、生命の三角形を人間に適用すると、第二圖に示したやうに、少くとも理論的に二十七種類の間人が存在するのである、此「成功の梯子」を登のぼる事は、人生を生いき甲

斐ひあらしめるものである、我々は此梯子の何處に位置して居るか、我々の友人はさうであるか、又同時代の人々、歴史上の人々は、さうであるか等を考へて其れが適當なる、位置を與へて見ると、大に發明する所があるのである。

反應	A B C A B C A B C A B C A B C A B C A B C
環境	A A A B B B C C C A A A B B B C C C A A A B B B C C C
遺傳	A A A A A A A A B B B B B B C C C C C C C C C
	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27

第二圖 成功の梯子  
A……優等  
B……普通  
C……劣等

左側の要素、即ち遺傳は一生の間、變化しないが他の二つは變化することが出来る社會學者や博愛家たちは中央の列、即ち環境の列と直接の交渉を有する教育家、特に親は右側の反應の列の要素と直接の交渉を有する。生物學者たちは左側の遺傳の列を最も尊重して居る。假令ばAOCと云ふ組織を有する子供はOOCと云ふ組織を有する子供よりも頂上に到達し易いものである。配偶者はいごうしよを撰ぶ時にはCAAと云ふ組



織を有するものより見掛上は遙に劣るやうに見えるかも知れないけれどもACCと云ふ組織を有するものと結婚する方が、遙に賢い措置であらう、と云ふわけは遺傳は人間のもつて生れた本性で一番大切であるからである。

とは、實驗遺傳學の告ぐ所であるが、只に丈の高い低いとか顔が長いとか圓いとかと云ふ、形質の遺傳でなく、性質も遺傳するから、我々日々の生活にも深甚の注意を拂はなければならぬ。

大正七年二月のことであつた、其十一日より數日、大阪朝日新聞に悲惨な記事が連載されたことがあつた。其れは昔し長崎に寫眞界では誰れ知らぬ者はない有名な上野彦馬と云ふ人があつた、所謂寫眞成金で、有福であるから、自儘勝手に豪遊を極めた、それで其子の陽一郎と云ふも、父に學んで放蕩無頼であつて、其結果財産を浪費し盡し、終に妻は二女を残して家を出で、一家は全く破滅し、其彦馬翁の孫である八重子と云ふは父の引受けた病毒の遺傳で、不幸にして啞に生れ其上に、家庭の不遇に

堪へ兼て二十二歳にして左の悲惨な一書を残して鐵路の露と消えた。

……骨肉を分けた母が目と鼻との間に居りながら一目も會へぬとは何とした情けない事でございます、私は一目でもお母さんに會へないのが残念に――思ひますが併し何うする事も出来ません。是もお父さんの御心得が悪かつたかと、私は諦めて居ります。

思へば啞聾になつて人に後ろ指さされる私ほど不運なものが又と世にございませうか、お父さんの行方は其れからは、まるで判りません、風の便りに聞きますればお父さんは獄屋に捕はれの人となつて居られるとか、ア、私はどうしませう、私が諫早(地名)へ行く時は、有るだけの衣服も持つて参りましたが、其れはスグ無くなつて仕舞ひました、ほんとうにお父さんのやうなお方はございませぬ、私の死んだと云ふ事をお聞きになつて改心して下さいますれば、私は本望でございませぬ、今日のところ見込はございませぬ、私が死んだ事が世間に聞へますれば名譽ある上

野家の家名を傷つけて申譯けがございませんが、私の今の身は死ぬより外に仕方は  
ございません。(中略)

と云ふ血に泣く筆跡を残して、長崎市外の鐵路で汽車の響きの中に消え往つたのであ  
るが、實に見るも憐れな記事であつた、如何に自分の腕で儲けた金でも、如何に親よ  
り譲り受けた産でも放蕩の爲に遺族を斯る悲境に押し墮すは不倫不徳の極ではない  
か。勿論自家の財を如何に散ずるも勝手であり、法律は少しも咎めず、自由ではある  
が『丸い玉子も切りやうで四角ものも云ひやうで角がたつ』、金も使ひやうで罪にな  
る、だが其の資を事業か教育に投ずれば後ちの世迄も光る。家産の爲に争ひや悲劇を  
貽さぬやう慎まねばならぬ。當時京大教授藤波博士は『父親への注意』に左の文を新  
聞に載せられた事があつた。

貴紙に連載せる『美人に生れたる啞娘』を読んで、私は父親の放蕩の結果が圓滿  
なる家庭を破壊し妻は愛兒を棄てて家を去り、娘は父の病毒遺傳の爲めに生れもつ

かぬ不具聾啞となるのみか、妙齡二十二歳の花の身を、あたら鐵路の露と消えるに  
至つた人生の悲劇は、實に痛ましき限りであると思つた、世間には斯うした父親の  
不身持より起る、悲劇は多くある事を思ふが、是らは皆父親其人が品行を慎むたな  
らば斯る悲劇は起らず、家庭は常に春麗かに平和であるべきであるから父親たる人  
は此點に大いに注意して貰ひたいものである。可愛い啞娘は、父親の微毒が遺傳し  
たものであると云ふが、實際遺傳微毒は幾多恐るべき病氣を子孫に遺すものである、  
一見素人にも知られるものは身體各所に發する腫物發疹や鞍鼻、鼻加答兒、口頭加  
答兒の類であるが、肺炎、肝臓、脾臓、腎臓等の體內臓機を冒すもの、眼に來ては  
角膜炎、脈絡膜炎、虹彩炎、網膜炎を惹起し骨の發育に變化を來す等の症狀が多く  
遺傳微菌にある事は、吾々が、死體解剖の際、病原體を多く發見する事によつて明  
らかである、斯る病疾を惹起するのみならず、既に胎兒が母體にある時、冒されて  
流産死産する例は殊に多いのである。胎兒が度々流産する家庭は十中の八九は、微

毒性疾病の關係であると思ふ。一般に遺傳微毒と云つて居るも醫家の間には遺傳と傳染との兩説あるも病毒の子孫に傳はる事に於ては同一である。而て世間では全然健康なる母親か父親に微毒がある爲めに微毒性の子供を生むと云はれて居るが、是はあり得べからざる事であつて、病狀として現はれて居ないとも母親にも無論微毒性を有して居る者もある……父親の放蕩が温かき家庭の圓滿を缺き悲劇を惹起するものと思ふ……大酒家の子孫に精神病者や白痴が多く生れるのと共に、世の父親たる者は大いに留意すべきことであると思ふ。病疾の大部分は不節制の爲め、自分より起したものと、或ひは親の報ひを受けたものであつて、自然に來るものでないと思ふのである。

と病毒遺傳の恐しきを注意されたことがあつた。

只病毒のみでなく性質も遺傳するから更に恐しい、而も其れが一時でない、數代にも續くから一層慘だ。獨逸にアダヨークと云ふ不敬虔にして日夜飲酒に耽つて居た婦

人があつた、が大學教授のベルムンが調査した結果に依ると、其婦人から左のやうな人々が生れた。

私生兒	百九人
乞食	百四十二人
養育院入	六十四人
醜業婦	百八十一人
刑務所入	七十六人

是らの人々の爲に即ち養育院と刑務所とで此婦人の子孫の爲に七十五年間に費された金は二百五十萬圓であつた。米國にも無賴漢で、ヂユーク、と云ふ懶け者があつた、此男は一千七百二十年に、ニューヨーク洲に生れたのであつたが。一千八百七十七年の七代目には其の子孫は實に一千二百人の數になつた。其の内、三百十九名は先天的の貧困者で養老院の厄介者、三百名は天死、四百十名が飲酒や放蕩の結果全くの

廢人、百三十名が窃盜殺人其他の犯人、女子は其半數は醜業婦しうげふと云ふ慘狀である、で放蕩不節制の爲め、斯る子孫を遺すと云ふは、生れ出づる子孫も悲惨であるが、其れが爲めに、社會も經濟的にも精神的にも、どれだけ傷つけられるか分らぬ。

だが人は鏡に姿を寫して見ないと、自分の身も判らぬ。酒の害でも自分の鼻頭はなまきが赤くなるとか、舌が自在に廻らなくなる位では分らぬ。自分の可愛い子に、酒毒が染つて、放蕩となり無頼となり低脳ていなんとなり白痴となつて、眼の前に現はれて、始めて打ち驚くのである。悪因が斯く恐るべき悪果を生むことを現はされて、其處に深刻な悔恨の情も起つて來るのである。人は驚くべきものには駭おぞかなければならぬ、此恐しさの分る人は、まだ良心の曇りきらぬ人である、良心の目を見開ひて悪果の恐しさを悶へる所に、人間が獸ならぬ點が存するのである。禽獸に良心の呵責に悶死する種類はない、人の有難たさに、悶絶する程の痛烈なる其苦惱がある。其強烈なる驚きがある程、人たる點があるのである、人生の哲學も宗教も驚異から起つたが、破誠より來る

驚異も、人をして改心改造の途に導く、イエスは云ひ給ふた『幸福なるかな悲しむ者、幸福なる哉今泣く者』(太五〇四、路六〇二十一)と、今泣く者が幸ひなのだ、後に未來に悔い泣いても間に合はぬ。今である、今自己の罪を痛く悔いて泣く者が幸ひなのである。

而て人は心に悔いて泣くと共に、改悛の悶へもある、其れが又救ひの手がかりである。救ひの道があつても改悛の心がなければ、猫に小判だ。溺れて呼ぶ者に浮舟の用もある。罪に溺れた結果の恐しさを感じて、悶へる人に救ひが味得されるのである。イエスは『健なる者は醫者を要せず只病める者は是を要す』と、仰せられた、だから罪に病める人に救の醫が必要なのである。罪の悶へは救ひの門だ、故にイエスは『時は満てり神の國は近づけり悔改めて福音を信せよ』(可一〇十五)と云ひ給ふた。救ひには悔改の門より入るべきである、神の國は近づいた時は満ちた、『視よ今は恩みの時……救ひの日なり』(哥后六〇二)と、今だ今は優生學を以ても遺傳説を以ても如實に

見せつけられて居る、罪を悔て救ひにすぎるべき時は今だ。大酒家で小關と云ふ醫師があつた、酒害の爲に二人の低脳な子が出来た、で驚いて救ひを求めて信者となり、酒も止み、健康になつてから生れた子は丈夫で異状はない。反省の出来た時が吉日だ子にも孫にも罪を及ぼさぬ中に、悔改が出来れば更に上々だ。凡て人は友を要す、罪にも友が入る、で悔改が一日早ければ其れ丈け人にも悪感化を及ぼさぬ譯けた、破誠と氣づいたら直に悔改の門に急ぐべきである「善は急げ」、人は決斷が大切である。『視よ我れ今日汝らの前に祝福と呪詛とを置く』(申十一〇廿六)と、我れらは恩みと詛ひの十字街に立つて居るのである、自己も子孫も詛ひに往くか、救ひに入るか、誠を守るか破るかで、永遠の運命が定るのである。今が改悛の期である。

メンデルに依て遺傳が叫ばれても人は目を開かなかつた、漸く近來に至つて目を覺まし始めたが、是は永遠の昔からの神の定めである。信仰の父として撰れたアブラハムの信は子の、イサク、孫のヤコブに傳り、四代目のヨセフに至つては大人格が生れ

た、尙ほルツと云ふは、堅い信仰に厚い孝行の婦人で、亡き夫の母に仕へ自國を捨て母と共に他邦猶太に来て、而て落ち穂拾ひ迄もして、孝に盡した聖女であるが、其の信仰は祝福され其の家系から信仰界の偉人が多く起つた。而も神の書即ち聖書の中へ特にルツ記と云ふ一冊の書迄も編み込められ而て其家より子のオベテが出で、其子がエサイで、エサイの子が、即ちダビデと云ふ猶太の大王と云はれた人で、其の子のソロモン王は智と富とで世界一と云はれる人であつた、馬太が基督傳に擧げられた基督の系圖は信仰の遺傳史である。其れも撰民猶太人のみの信仰史ではない、ラハブもルツも異邦人であつた、だが信仰に依て貴いイエスの系圖に織り入れられた。(太一〇五)而て其信仰は流れ傳つて基督を世に生み出したのである。神を愛し其の誠律を固く守る者は幸ひだ、惡のみ遺傳するのではない、潔い信仰も遺傳する。神を愛し神の誠めを守る者には恩みを施して千代に至るとは神の固い約束である。遺傳は神の定めであつて、メンデルの創作ではない信仰の遺傳は昔しからあつた事で、パウロは弟子のテモ

テに對して云つて居る、「其信仰の先きに汝の祖母ロイス及び母ユニケに宿りし如く汝にも然あるを確信す」(提后一〇五)と、だから信仰は貴い。自己一人自分一代のことのみでない、末世末代までの祝福の約束である。前述のタットルの子孫が一六六七年より今日迄千三百餘名を祝された立派な人が續いて居る、天地は變つても神の約束は變らない。

で人は信仰が第一である、人の約束は變つても、神の約束は變らぬ、變らぬ恩みを千代に譲るが何よりの遺産だ、背信は子孫に流れる恩みを堰き止てその祝福を奪ふ、ただ信を持續して子に譲るのが一番の家寶だ、南洲の詩に、

幾歴辛酸志始堅

丈夫玉碎恥輒全

我家遺法人知否

不爲兒孫買美田

と兒孫の爲に美田を買はずだ、特に田地や高樓を選ずとも神の祝福が最上の遺産だ、信仰の遺産は家の遺寶である。フーヴァー大統領も幼き時に父母を亡ふた全くの孤兒

で叔父や叔母に育てられた人であつたが、代々家はクエーカー宗で堅い信仰の家系であつた、同派は第十七世紀後半に英國に起つた宗教で、靈的神秘的深い體驗を有したフォックスと云ふ宗教的天才家が、主導した一派で、今日のトラビストの信者の如く黙して靜に神と語ると云ふ信仰の系であつた、基督教の中でも堅い深い信仰の宗派である、神と靈交が此派の主眼である、家庭に於ての讀物としても、聖書を第一とし、其の外には、クエーカーの祈禱書と法話と、又讚美歌と、ミルトンの失樂園の如きもので小説などは家庭では一切禁じられてあつた。叔父叔母の家も同様であつた、彼は斯うした空氣の中で育てられ、其上に母が非常な熱信家で父の死後も一心に説教や集りをも助ける傳導者の資格もあつた程の神に忠實な母であつた。斯る空氣の中に生れる信仰を譲り受けたのであるから、幼にして兩親を亡ふても、フーヴァーは祝されて今日の位置を贏ち得たのである、子孫の爲に美田を遺すよりも千代にまで祝される信仰を譲が、家庭最善の計である。

尙ほ参考の爲に父母の年齢が子供に及す關係をも大體茲に書き添へやう。

(一) 父が五十五歳以上の時に生れた人。

釋迦、老子、孔子、アリストテレース、ベーコン、キユグイエ、フランクリン、キエルケゴール、ライブニッツ、ピット外四十二人。

(二) 父が四十五乃至五十歳の時に生れた人。

カトー、ゲラットストン、フンボルト、ロヨラ、ミルトン、オーエン、外四十四人。

(三) 父が四十一乃至四十四歳の時に生れた人。

ビスマルク、クロムウエル、ダーウキン、エヂソン、ラマルク、ベテロ大帝、外四十四人。

(四) 父が卅八乃至四十歳の時に生れた人。

ピーチャー、バーンス、カーライル、デスレリー、ゴエーテ、ゴールトスミス、ワシントン、ワット、外二十七人。

(五) 父が卅五乃至卅七歳の時に生れた人。

レツシング、マルサス、モツアルト、ネルソン、ニュートン、リシユリコー、シラー、外二十七人。

(六) 父が二十五歳以下の時に生れた人。

ナポレオン、ビユフォン、フリードリ大王、ハンニバル、外十人。

### 第十二章 家庭平和と未來歡

日入りて夕星我れを招く。

眠れるが如き大海は響と泡とにて充ち満てり。

余は之れに乗り出でんとす。

無涯の淵より出でたる余は。

復び其處に歸り往かんとす。

あゝ彼の門戸の通過を悲むなかれ。

夕照夕鐘而して後ち暗黒。

余の爲に悲むなかれ。

たとへ潮流は時所の限界を越へて。

余を遠く運び往くとも。

彼の關門を過ぐれば余は面のあたり。

余の嚮導者と相見るを得む。

とはテニソンの詩であるが又其未來觀である。而て其れが又基督教徒の未來觀である。基督は受難の前夜、痛く胸を驚かして居る弟子を慰めて言ひ給ふた、『汝ら心を騒がすな神を信じ我を信せよ、我が父の家には住處おほし、然らずば我れかねて汝ら

に告げしならん、我れ汝等の爲に處を備へに往く若し往きて汝らの爲に處を備へば復た來りて汝らを我がもとに迎へん我が居る所に汝らも居らん爲めなり』(約十四〇一三)と、更に又『我は道なり眞理なり生命なり、我は復活なり生命なり我を信する者は死ぬとも生きん』と、も云ひ給ふた、で死の關門を過ぐれば、余は目のあたり余の嚮導者と相まみゆるを得むと、テニソンが云ふて居るのは、信者の爲に所を備へて待ち給ふ基督と顔と顔を合せて相まみへんと云ふ信仰の詩である。パウロも云ふて居る『かの時には顔を合せて相見へん今我が知る所全からず、然れどかの時には我が知られたる如く全く知るべし』(哥前十三〇十二)と、基督と面面相接してまみへ奉ると云ふ、其時に最も高い生命に向上し、現在の不完全な知は完全知となり、自己が神に知られた如く神を全く知るの高い生命に進展すると云ふのである。

而て生命には實際不思議な現象が存する、例へば蠶の如きも發生した時には、極く小さい黒い虫であるが、三眠四眠に至ると終に小指大の虫となり、所謂蠶食の大活劇を



始める、が其れが巢を作つて繭まゆに身を潜ひそめるや、不食不動全く静止の状態だ、が瓦石がらせきとは異つて生命はある。日に晒さららすか針で突けば自動する、岩石ではない、生活を營んで居る、不動の體からだで大活動して居る、大家竣工の際には大工、左官、人夫、監督が大活動をする、況や蛹まぶが俄にわかに蛾がの生命を建築するのであるから、丸木小屋を西洋館にするよりも一大工事である。が神秘だから分らない、分らぬが暗中飛躍を試みつゝ一大活動を演じ、數日にして蛾となつて繭より踊り出だす、實に生命は神秘である。蝶の如きも變化榮進花の間に舞ひ遊ぶ生活に向上す、更に蟬せみに至つては、地の中に隠かくれたる四年間の幼虫生活、其れが地より出で殻をわつて榮化するや、木樹の間に飛去ひきまひ飛來、生を悦び夏を歌ふて暮す讚美の生活に進む、生には大飛躍がある、實に生命は不思議な現象である。

啻に動植界の生命のみでない、我々自身の有する生命でも考へ來たれば、母胎に眠て居た生命である。が其の眠れる間に、現在生活の活動が畫策されて居たのであつた併し其れは如何に計畫されたのであつたか少しも分らぬ。私其の生命は分らぬ世界から轉じて來たものである、我々は現在の世界でなく、別の世界に生活して居た、別世界だから分らぬ、生活機關が差ふ。胎兒の間には母に臍へその緒をより養はれて居つた、が生れるや、臍の緒は斷ち切られて、生活機關は奪はれる。だから生れるは一種の死だ、ロングフェローは歌ふて云うた、「死てふ者あることなし、死と見ゆるは變化なり」と、死は變化であり榮進である。胎兒たいていの生活は死んで、嬰兒わいじの生活に生れるのである、生るゝや生活の様式も一變して舌で乳を吸ふ生活に移る、斯くして現世生活の活動が開始せられた。

胎兒の生活は現世生活に移る準備の生活であつた、眠るのは覺めて働く元氣回復の準備である、蠶かひこが蛹まぶとなつて繭まゆの中に眠るのは、更に高き生命に進む備へである。母胎の安眠も、高き生命に躍進やくしんせんとする準備であつた、而て今日の活動が終ると明日の活動の爲に我らは眠る。が其の如く現世の活動が止むと、來世の働きに入る爲に眠

る、其の眠りも起る爲で、蠶の眠りが蛾に覺んが爲めである如く、我らの眠りも更に高く生きん爲めの休憩である。基督教には更に高い覺めた生活がある。基督は其れを自身の復活の生命に現はして如實に示し給ふた、生命には色々の變化がある、死も一つの變化だ、復活の生活への飛躍である。パウロは説いて居る。

『人或は言はん死人いかにして甦へるべきか、如何なる體をもて來るべきかと、思なる者よ汝の播く所のもの先づ死なすば生きず、又其播く所のものは後に成るべき體を播くに非ず麥にても他の穀にても只種粒のみ。然るに神は御意に隨ひて之に體を予へ各の種に其體を予へ給ふ。凡ての肉同じ肉にあらず、人の肉あり獸の肉あり鳥の肉あり魚も肉あり。天上の體あり地上の體あり然れど天上の物の光榮は地上の物と異り。日の光榮あり月の光榮あり星の光榮あり此の星は彼の星と光榮を異にす死人の復活も亦斯の如し、朽つる物にて播かれ朽ちぬ者に甦へらせられ。卑しき物にて播かれ光榮あるものに甦へらせられ、弱きものにて播かれ強きものに甦へらせ

られ、血氣の體にて播かれ靈の體に甦へらせられん』(哥前十五〇卅五―四十三)

とはギリシャのコリントの信徒に送つた書翰の一節であるが。ギリシャ人のやうな理窟で固まつた頭にも、斯の位に説かれたれば復活の理も分つたであらう、醜い虫が美しい蝶と化す如く、卑しい我が體も、榮ある靈體に甦へらせられる。基督信者の望みは此世のみでない、其の生活は墓までの生涯でない、基督者の生涯は無限である、マホメットも云ふた、『墓は永久の世界に往く第一歩である』と、テニソンは尙ほ又「死は吾らが更に高く飛ばんとする時の敷石なり」と、死は生への飛躍だ、死は更に高き新生活に踏み出だす第一歩である。

故に基督者は死に直面しても驚かない騒がない、『驚かさぬは彼らには亡びの兆、汝らには救ひの兆にて是は神より出づるなり』(腓一〇二十八)と、あるが如く、基督教徒の生命にも死にも驚かざる強い力がある、前に述べた信州大町の南部小三郎氏が他に嫁した自分の長女が死んだと云ふ電報を握り汽車に身を投げ入れて東京に走る途

中、列車内にて例に依り盛な宗教談で同乗の客は、斯る事の爲に急ぐ人とは誰れ一人も思ふた者はなかつたが。あとで其れが愛嬢の訃音を聞いて東京に走る途上であつたと云ふことが分つて其時。共に車中に居つた知人は驚いて、南部氏は信仰家と云ふことだが全く違ふと云はれたさうである。基督に救はれた人は、死が何時襲ふても迷はない、其れが又自己の身に迫つても恐れない、大正十二年一月二十八日のことであつた。同じ信州の松本で半年以上病床にあつた横石かほると云ふ十九の一人娘に死が襲ふた、同地の夜、寒い十二時頃醫師は注射をして歸つた、醫者は去つたが、病勢は去らず、愈々二時頃になつて臨終が迫つたので、神を呼び基督を徹に呼んで居られた。其れまで只一人の子供故に親たちは如何にもして回復させ度いと身心を盡して、あらゆる治療に努めて下されるので病者も死と云ふ問題を口にせられず、私も其時までには遠慮して居たが。斯る場合云はざるを得られぬから、「準備は出来て居ますか」と問ひ始めた、所がハッキリと『準備は既にどうに出来て居ります』と答へられた、だが

何か考へて居られるやうであるから、何か考へて居られやうであるが、御両親のことを心配なさるのでありますかと問ふと『さうです』と答へて、其れから、父と母に向つて傳道を始められ、私は基督に召されて父の御許へ往くのであるから幸ひであれども、父さんも母さんも基督を信じて後から來て下さるやうにと。繰り返へし繰り返へし何回も云はれるので父さんも母さんも泣きくづれて仕舞はれたが、斯て長くあるべきでないと思はれて父は神を信じて後から行くから安心して神の許に行つてくれと云はれ、母も亦同様に云はれたので、始めて安心せられた、其れから黙示録の七章の終りを奉讀して且つ祈つて、葬式の際に歌ふ愛好の讚美を尋ねたれば、直に主にのみ十字架を負はせまつりと答へられたので、お母さんと共に歌ひませうかと云ふと、喜んで頷ぶかる、儘お母さんと共に歌ひ始めた所が、病姉も共に高い聲で歌ひ出だされ。

主にのみ十字架を

われしらすがほに

おはせまつり

あるべきかは

と一節歌ひ終り次を歌う時には早や聲が出なくなつたので、細く静に讚美を歌ひつゝ、莞爾として永き眠りの眼を閉ぢられた「主にありて死ぬる死人は幸福なり」(黙十四〇十三)との聖言の通り、實に平和な幸ひな永眠で御兩親も驚かれた、而て葬儀も濟みて、墓標に聖句を書き入るゝ爲に故人の聖書を開て更に驚いた。臨終に死の準備は既に出來て居ると云はれたが、眞に準備が出来て居た、先づ聖書の始めに、讚美歌二百六十一の主のみ十字架を、おはせまつり、の一節と第三節の、「わが身もいさみて、十字架をおひ、死にいたるまでも、つかへまつらん」、との二節を書き記し、聖書中の、死、復活、天國、再臨等に關する聖句には悉く、朱線又は卷點或は感じを記入し哥林多前書十五章には上に復活を信する者は幸ひなりと大書してあつた、殊に臨終に讀んだ黙示録でも、葬式の時に他の牧師が奉讀した聖句でも既に卷點が記されてあつた、實に聖書を能く味ふて居られた者であつた、實に痛感させられた、此信あつて此死があつたのであると。

而て青年の死には概して苦痛がある、勿論、老人にも苦み跪ひて死する人もある、八十餘の老婦人で三人の下婢に侍づかれ、何不自由なく生活して居た老女で、肺炎に罹り、非常に跪き苦しまれて、堪へられぬから庭の池に投げ入れてと度々に側の者に迫られて數日惱み苦んで終に悶死された話しを、其令妹の方から聞いたこともあつた。苦み悲みで死なれると遺される者も苦しい、さなくても子供の死には悲み窮つて遂に狂する親も多くある。頼みとし力とする人に先きたたれて一家破滅に歸する家庭もある、で自己が死に直面した時のみでなく、親しい者、家庭の者に死の波が押し寄せた時に、動せざる心の準備も入る、信長が青年の時、出陣するに臨んで、吟じた詩に「人生五十年、乃如夢與幻、有生斯有死、壯士將何恨」と生あれば死がある、是れは誰れでも辭むことは出來ぬ、誰れにでも何時見舞ふか分らぬ「だが死んだ彼れが死んだと云ふ中に我れも死んだと人に云はれん」で、人のことではない、何時自分の上に襲ひ來るか分らぬ、而て人生五十年とは極つて居ない子供にも死は見舞ふ、

だからころばぬ前きの杖、準備が肝要である。

故に家族の誰にでも死に面しても惑はぬやう教へて置かねばならぬ、殊に死は老若男女の區別せぬ如く病者健者の別なく襲ふ。金井と云ふ夫人は三十三歳の時、十二と九歳の令嬢二人と四歳の男子と三人の子を有して居られたが其年の十二月中旬に此月中と云ふ死の宣告を親戚の醫師より受た。それで惑はれて全然世は暗黒と化した、而て數日死の床に苦んで居られたが、悶へた末に、其家より他家に嫁した義妹の夫婦が熱心な基督信者で義妹が里に歸る毎に、神の話しを聞かされたこともあつたが、農家の事とて暇になつたら聞かうと云ふて、耳にも留めなかつたが、斯る時こそ基督の教へでも聞いたならば、少しは心も安まうと思ふて、家の義弟を義妹を呼びに遣り其義妹より救ひを聞れ其後其義妹に連られ私しも往き、基督教の大意を二時間斗り話した、が瀕死の重患であるから餘りに永きは氣の毒と思ふて、又日を経て往つて、靈魂の不滅、甦り、無限の生命、天國と云ふ未來の問題に就て又二時間斗り話した。所が

非常に喜ばれて、どうして是れまで斯のやうな教を聞くことが出来なかつたであらうか、今少し早く聞いて置いたならば、病氣しても今迄のやうな心痛はなかつたであらうが、今でも是れを聞くことの出来たのは幸ひであると思ふて、死の準備も全く調ふて其の妹に三人の愛兒を托して、自分の亡き後には三人の子女を神に導いて貰ふやうに頼んで、主の救ひを固く握つて死の床に於ても平安の喜に入られた。

而て心を平和にすると、同時に、神は準備の時を與へ給ふた、其十二月限りと云はれた生命が翌年の七月まで續いて其間非常に信仰が進んで奇蹟と思はれるやうなことも度々であつた、それで家に信仰者も起つた、が七月三十一日に至り、愈々別れの時が來た。が準備全く調ふたから少しも平素と變りはない、我らは枕頭に會して小集會を開いて讚美を捧げ且つ祈つた、午後又三時に六名會して御言葉を語り神を讚美し、且つ共に祈つた、而て更に三人の子供を呼んで呉れと病人は云はれたので、三名の子供たちが列せられたので九人の集りとなつた其時金井夫人は三人の子供に、調へて置か

れた聖書を一冊づゝ與へて、是をお母さんだと思ふてくれ、母は神に召されて天に行くが、決して死んで居なくなるのではない。神の許で待て居るから、お前方もイエス様を信じて後から来るやうに、お母さんのことを思ひ出だし時には聖書を開いて見なさい。お母さんの思ふ事がよく書いてあるから、と大い娘には大い子のやうに五歳の子には其れに適する遺言を一々し、他の六人の人々にも一人一人に別れを告げ、殊に好んで居られた讚美歌の四百五十六や、子供の爲めの讚美歌を捧げて祈つたが其間約一時間、其處に居た者は皆恍惚状態であつた、夫人の實母、小松と云ふ老姉も、基督教で云ふ天國とは、かう云ふものでありませうかと云はれた。實際其一時間程は、此世もさながら天國のやうな思ひであつた。病人も醫師には重體と云はれて居られたが別に苦もなく痛もなく、又悩みもなく、其翌八月一日の夜靜に深き眠りに入り將に日近かんとする。四時に安らかに永き眠りに就かれた「死より生命に移れるなり」(約五〇廿七)との聖句の如く、夫人は既に死の床より生命に移されて居られたのであつた

から、死の苦も恐れもなく、真に唯一の變化であつて、更に高い潔い生活へ新に第一歩を踏み出だされたのであつた。

信仰生活の滋味が深く分るのは死に直面した際である。ウエスレーは臨終に『最も善きことは神我らと偕に在ますことなり』、と云はれた、死に面しては山なす富も何十の友も、死出の連れとなるものは何もない、斯る時にこそ善きは神偕に在ますことである、信仰生活の妙味の解せられるのは是からだ、救ひの恩みの深さ高さの知得せらるるのも是れから始まるのである。

我れ肉を離れて神を見ん。

我れ自ら彼を見奉まつらん。

我れ汝のことを耳にて聞きたりしが。

今は目をもて汝を見たてまつる。(伯十九〇廿六七、同四十二〇五)

とあつて。耳の信仰が眼の信仰に進み、信仰は聞くより出でて見る生活に入るのであ

る、神と偕にある生活は無限の生活だ、基督の與へ給ふ生命は限りなき生命だ、人生五十年ではない、無限の生活である、で無限であるから、十代で死ぬとも五十で死ぬとも百歳で逝くとも、無限の生命に比すれば問題ではない。死は無限の生活の一變化だ、耳の信仰生活が信の目を見開く世界に移るのである。去る六月二十三日の聖日も神戸の七年前に永眠された、親しかつた故人の家を見舞ふた。其際未亡人の御話しに故人が死に臨んで、病室全體が黄金の世界となり種々寶玉に輝き、且つ四季の花が満ちて居る。天國には一時に四季の花が咲いて居る、何と美麗ではないか、お前には見えないかと云はれて歡喜に満ちて、六十五歳で世を辭されたとの話しであつた。又樟森女子と云ふ婦は年もまだ二十四歳で子供も二人を残して去らなければならぬのであるのに永眠の三日前より基督様が迎へに來たまふた。美しい天の御國へ往くのだ、母や夫にも基督様が御出でになつた、見えぬかと云ふて其の光榮を見て悦び、而て神の御許に往くので嬉しいし、只二人の子供を頼むと良人に依頼して、唯一切を神に委ね

て喜んで居られたが。一月の十三日午後三時頃、炬燵によつて滋養を食したり話したりして居られたが、懸て炬燵の上に平れ伏て祈つて居られた、が餘りに永いので呼んで見たが答へられず、三十分程経て起して見ると、ニコリと笑みて永き眠りに入つて居られた。而も側に居つた良人も母も知らぬほど、靜に安らかに、神と共に顔と顔と合せて相まみゆる、見る信仰世界に向上された。眞個に『主にありて死ぬる死人は幸福なり』だ、斯る安らかな幸ひな死。遺族にも少しも悲みも残さず、反て輝く希望を與へ信仰を高むる、信仰生活の教訓を貽す、『エホバの聖徒の死は其の御前にて貴ふし』(詩百十六〇十五)だ、活る神を信する者は、死んでも活る教訓を遺す、基督教徒の生活は實に幸ひだ。

勿論信仰には體驗の世界がある、體驗の世界があるから、其體驗にも亦程度がある。人皆一樣には往かぬ、信仰の度に依て各自異なるやうである、大體より云へば純信の高潔な生活を續けた人は臨終も美しいやうである、サンダーシングの靈界の默示に依

ると彼は種々なる靈界の有様を示されて居るか、其の書いたものによると、未來の世界にも段階があるやうである、暗きの子と、光りの子の居る所も異なるが、人に依り信仰に依て差が存するやうである、其の一二の事を擧げるなれば。

一人の幼兒が肺炎で死んだ。其時一群の天使が来て彼の魂を靈の世界へ護つて行つた、私は彼の母が此驚くべき光景を見る事が出来る事を希つた、若し出来たならば泣く代りに喜びを以て歌つたであらう。そは天使等が此の幼兒をいたわり注意する其愛と行届いた取扱ひとは如何なる母もなし得なかつた所だからである、私は一人の天使が他の天使に向つて曰ふを聞いた、『視よ此の幼兒の母は僅に短い別離の爲に如何に悲み泣いて居るかを、僅か數年の後には彼女は其子供と再會の幸福を得るのであらう』と、斯くて天使等は幼兒の靈魂を天の美しい光りの滿る所に導いた之は幼兒の爲に特に定められた處である。此處に於て御使等は凡ての必要な天の知慧を彼等に與へて次第に生長し遂に幼兒は天使の一人の如くになつた。

或時を経て後、子供の母も亦死んだ、其時天使の様になつて居た彼女の子供は天使等と共に來て彼女の魂を歓迎した『御母様あなたは私を御存じありませんか私はあなたの子セオドルですよ』と云ふと母の心は喜びに滿ち溢れ互に抱き合つて喜びの涙は花びらの如くに落ちた、之は實に感動すべき光景であつた、其れより彼等は偕に歩みながら種々なるものを指して彼らの四圍にあるものを母に説明した、而して中間状態に止まるやう彼女の爲に指定された時の間、彼も母と共に留まり其世界に入る爲に教へらるべき必要な時期が終つた時に彼自身の住んで居た更に高い境域へ共に登つて行つた。

……其時彼は母に曰ふた『世界に在るものは此の眞の世界の朧な投影に過ぎない、我らの愛する人々が我らの去つた爲に悲みつゝあるけれども之は死と言ふべきか將た、あらゆる人の心が憧れる所の眞の生命ではありませんか』と母は答へて曰ふた『子よ之れこそ眞の生である若し私が地上に居つた時、天の眞理を充分に知り得た



ならば決して御前の死に就て悲嘆にくれなかつたであらう。』

と云ふてあつて、更に高い境地の存する事が書いてあるが、又一哲學者の死に就て書いた所によると。

其時天使等が彼に答て曰ふた、「君の言によつて智識偏重主義が君の全性質を歪ませて居る事を知る、靈界を見る爲には靈的の眼が必要であつて、肉體の目は必要でない、其實在たるを悟る爲には靈的理解力が必要であつて、論理と哲學との基礎たる智的の働を必要とするのではない、物質的事實を取扱つた君の科學は君の頭蓋骨及び腦髓と共に世界に残して來たのである此處では只神に對する恐れと愛とから出づる所の靈的な智識のみが必要である」と其時天使の一人が他に向つて曰ふた「汝ら改まりて幼兒の如くならずば天の王國に入のを得ず」……天使らより必要な教訓を受け得る心の準備をなし良く教へられた後に初めて神の光が更に滿つる高い範圍の中に入る事の出来るものとなると答へた。

と云々である。其信仰の程度に依て直に高い世界に入ることの出來ぬ者もあるが、臨終に於ても、靈的生活が進んで、聖書をよく味ふ人、神とよく交る人はエホバの聖徒の如く其死は貴い。

貴きは基督による信仰生涯である。高い深い清い楽しい生活で而てよきをなして人をも世をも益し、自も人も神も喜ばせ、圓滿まんまんなる喜びの生涯、而も進めば進む程恩みも加り感謝も増す、真に無限の生命である。殊に死して尙ほ盡きぬ高き永き生命、死の床にも限りなく歡喜くわんきの湧く信仰、是ぞ人間の信仰、是ぞ人間の宗教である。

渴く者は來たれ、望む者は。

價ひなくして生命の水を受けよ。

此書の預言の言を守る者は幸福なり。

(黙二十二〇七、十七)

## 家庭の福音(終)

昭和四年九月一日印刷  
昭和四年九月五日發行  
昭和八年十一月廿日改訂再版

〔定價金四拾錢〕

著者 原三千之助

發行者 小 林 峯 吉

姫路市驛前町二〇二ノ一八

印刷所 小 林 印 刷 所

姫路市驛前町二〇二ノ一八

不許複製

姫路市驛前町二〇二ノ一八

發行所 小 林 印 刷 所

電話姫路一六九六番

終

